Re:Demonslayer 両断から始まる鬼食い転生記

death13

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Ｒｅ：Ｍｏｎｓｔｅｒのシステムを持つ、鬼滅の刃世界とそっくりな世界の不死川玄弥に、死亡直後の原作不死川玄弥の魂を叩き込んでみただけのお話。見切り発車。

目次

《一日目》～《二日目》 1
《三日目》～《五日目》 8
《六日目》 16
《七日目》 25
《八日目》 32
《九日目》～《一七日目》 41
《十八日目》 66
《十九日目》～《二十六日目》 78

《一日目》～《二日目》

《一日目》

六道輪廻、という言葉がある。仏教用語だ。俺は学がないので詳しくは知らないが、六つの世界を生死を通してぐるぐる回る、という意味らしい。

鬼とは言え、元人間の身体を食ったのだ。流石に極楽浄土には行けないだろうと思ったが、どうやら俺はその、輪廻転生という奴をしたらしい。それも、同じ時代の同じ人間に。つまりは、過去の自分に。

鬼、それは鬼舞辻無惨の血液によって人間から変化させられた怪物であり、人を主食とする存在だ。日輪刀で頸を断つか、日光に当てて燃やすかしか対処法が存在しない。

そして俺は強靭な顎と消化器、特異体質によって鬼を喰いその力を我が物とすることができる。完全な鬼化は食った直後、一時的にしかできないが、完全な鬼化状態でなくとも死ににくくなったり、今まで食った鬼の血鬼術を出力は落ちるが振るえたりする。血鬼術に関しては経験が少ないので推測と勘だが。

俺は不死川玄弥、鬼滅隊の隊士だ。だった、というべきか。それとも、なる予定だ、というべきか。

上弦の壱の血鬼術で身体を両断された後、上弦の肆から食らった血鬼術で上弦の壱を妨害した後は意識が混濁していてよく覚えていないが、兄に看取られた記憶はあるのできっと倒せたのだろう。

そうだ、俺は兄に看取られたのだ。あの迷惑ばかり掛けてしまった兄に。守ってくれた兄に。強く、優しい兄に。クソッタレな人生だったが、あの兄に看取られたことは数少ない素晴らしい出来事だった。

輪廻転生、と言っても生まれたばかりの赤ん坊に転生したわけじゃない。今、俺がいるのは藤襲山の中腹から少し上ったところ、の木の上だ。どうやら俺は眠っており、目が覚めた頭に未来からやってきた俺の人格と記憶が流れ込んできたようだ。今も少し頭痛がする。

記憶を、「この世界線の俺の記憶」を辿ってみる。どうやらこの世界も、前の世界と大した違いのない歴史をたどっているようだ。つま

り、鬼舞辻無惨が生まれ、鬼のせいで多くの人が死に、そして、俺の母親が無惨に鬼にさせられて兄・実弥に討伐された世界である。家族との会話の内容など、小さい部分は異なっているが、そこは残酷なまでに同じだ。

俺の記憶がもっと早く戻っていれば。強くなって家族を守れたかもしれない。母が人食い鬼になんかならなかったかもしれない。兄貴が鬼になった母を手に掛けずに済んだかもしれない。

違う世界線の俺の記憶だが、それも俺の記憶であることに変わりはない。無限城にいたあの時の俺と、最終選抜試験を受けている俺とが一つになっているのだ。

「もしも」それを夢想せずにはいられない。

何故今なんだ。天を呪わずにはいられない。

だが、それは過去だ。無限城にいた俺にとっても、最終選抜試験を受けている俺にとっても過去なんだ。

だけど今からは変えられる。より少ない人死にで鬼を狩るのだ。無惨を殺すのだ。胡蝶さんも、煉獄さんも、隊士の仲間も死なせない。俺がもっと強くなれば、多くの人食い鬼を殺せばその分助かる人が、命を落とさずに済む仲間が増えるのだ。

柱を目指して焦り、他者との軋轢を増やすような無駄なことはしない。効率よく、多くの人の命を助ける。そのためには仲間との協力が必要だから。全員は不可能かもしれない。だが、できるだけ多くの人の命を守り、できるだけ悲劇を減らす。そのために。

頭を冷やし、今現在のことについて考える。今は最終選抜試験の一日目の夕方だ。鬼は日中には姿を表さないため、太陽が照っている中に睡眠を取った。その時に俺の未来の記憶が甦ったわけだ。

兎にも角にも鬼を食わなければならない。鬼を食えば一時的にしろ半不死になれるし、恒久的にも死ににくくなる。何より身体能力や体の丈夫さも向上する。呼吸による身体強化を使えない俺が鬼と戦うには必須だ。

まあ最初の一匹はその鬼食いによる強化無しで鬼を狩らなければいけない訳だが。

自分を囮にして罠にでもかけるとしよう。多少の危険は伴うが、手鬼は既に炭治郎が倒した筈だし、おそらく大丈夫だろう…

念のため逃走経路を幾つか見積もっておくことにした。

罠は昔ながらの竹槍落とし穴だ。深く掘った穴に竹槍を刺し、穴に枝と土で蓋をする。いくつか罠を作っているうちに日が沈んでしまった。夜は鬼の時間だ。だが、俺は自らを囮にしている。警戒しながら、警戒していないような挙動をしなければいけない。武装も解除している。ここで不意打ちを食らったらおしまいだ。

そうこうしていると、鬼がやってきた。どうやら釣れたようだ。

「ウィヒヒ、トロそうなガキがいるじゃない。良い狩場は手鬼の奴に取られちまって…飢えて死んでしまうところだったが、私にもツキが回ってきたようだ。ティヒヒ」

どうやら、こちらが気付いていることに気づいていないようだ。

女の鬼か…　正直食うのは気が引けるが、手段を選んではいられない。何よりこいつも数人とは言え人を殺して喰っている。同情の余地はない。

「いいただぁきまァアッ!?」

鬼が罠に落ちた。藤襲山にいるのは手鬼を除けば下級の鬼だ、再生速度も大したことはないだろう。落とし穴の中に腕を入れ、日輪刀で四肢を削いでおく。

「おまぇえ…ハメやがったなぁ!?」

「ハメたが。食った後は殺すから、今までの人生、いや鬼生でも振り返ってろ」

「食う!?お前鬼食いか?気違いが…」

「それを言える鬼は禰豆子だけだろう。ごちゃごちゃ喚くな」

喉笛を切り付けて黙らせる。鬼の体を切り刻み、再生した片端から、くう、食う、喰う。決して美味くはないが、奇妙な、喉にへばりつく触感だ。

［能力（アビリティ）名【治癒加速】のラーニング完了］

［能力名【臓器欠損耐性】のラーニング完了］

［能力名【断頸脆弱】のラーニング完了］

［能力名【陽光ダメージ致命】のラーニング完了］

・・・・・・は？

《二日目》

再生しなくなった鬼を喰い終わり、日輪刀で首を斬ると、もう夜が明けて朝日が射していた。

昨日起こった謎の現象を振り返ってみる。

まず、喰った能力の名前が脳裏に響いた。ここからまず意味不明だ。

そして、能力はオンオフが可能なようだ。能力については【治癒加速】で実験した。【陽光ダメージ致命】で実験しようとも思ったが、流石に危険そうなのでやめた。

俺の体質…というより、「この世界」そのものが、もしくはそれに対する俺の認識が変わっているようだ。

一時的な鬼化は変わっていないようだ。らぁにんぐ――――――――後で知ったが、習得という意味の英語らしい――――――した能力が一時的に強化されていた。

鬼化が終わってもある程度の能力は保持したままのようだ。これも変わっていない。鬼化状態が終了しても、再生速度は遅いが、一応は目に見える速度で再生していっている。

鬼化状態で【陽光ダメージ致命】を切って日光に当たるとどうなるのかと思い、指を日光に当ててみたが普通に燃えた。しかし、普通の鬼より燃える速度は遅い、気がした。あくまで気だ。

つまり、前の世界では鬼食いによって何となく強化されていたが、それが「アビリティ」という形で明確化されたのだ。それに一時的な鬼化による強化も乗る。

これは、すごい。明確な能力がわかるということは、自分の手札を確実に把握できるということだ、アビリティだけが手札であるという誤った考えに陥らないようにはすべきだが、そうした勘違いを仮にしたとしても、戦闘を有利にすすめることができるだろう。

とりあえず、当然のものとして【断頸脆弱】と【陽光ダメージ致命】はオフにしておく。はたして鬼化していない状態で【断頸脆弱】をオ

フにして意味があるのかは疑問だが…
実験を一通り終えて、日もかなり高くなってきた。俺は最初の鬼を喰らってそれなりに強くなっているだろうし、手鬼以外の鬼なら喰い漁ってもいいところだろう。他の隊士候補生の命も助けられる。
と思っていたが、日中なのもあり、中々鬼が見つからない。木の洞や土の中に隠れているのだとは思うが… 鼻の利く炭治郎と合流した方が良さそうだ。口が堅い炭治郎なら鬼食いも黙っていてくれるだろう。隊律違反で鬼殺隊を辞めさせられると色々と支障をきたす。
炭治郎を探しているうちに夜になってしまった。昨日のように警戒していないフリをしつつ鬼を誘ってみる。
しばらくすると、鬼が釣れた。
「おい、あのガキトロそうだぞ」
「仲良く二人で別けようじぇ～あにきぃ」
「てめぇの兄貴は俺が食ったつったろ、いい加減現実を直視しやがれ！」
そこにいたのは、異様に腕だけがでかく、足が小さい鬼と、そいつを肩車している異様に足のみがでかく、腕が小さい鬼だった。会話の内容から察するに、腕鬼が足鬼の兄を食い殺した後に足鬼が鬼化させられたのだろう。あまりにも悍ましく、吐き気のする会話だ。
一当てして逃げる（ヒット・アンド・アウェイ）。まず鬼の体の一部でも奪い取り、鬼化状態に入らなければ下手すれば殺されてしまう程度には強い鬼だと考えた。おそらく一人一人ではバランスも取れず、弱いのだろうが、二人で組んでいる相乗効果からそれなり以上には強い鬼だ。
まずは走って相手の視界から外れる。その後、迂回して相手の後ろから忍び寄る。
「あのガキ！気付いて逃げやがった！どこ行きやがった、追うぞ！」
「えぇ～あにき背負って走るのつかれるからやだぁ」
「馬鹿が、今晩の飯を逃したいのかッ」
忍び寄り、足鬼の小さい右腕を切り落とす。そして右腕を持ち去って逃げる！
足鬼の小さい腕で支えられていた腕鬼は、ぐらぐらとバランスを崩

した。
「うお、うわ、ぐぅうッ！こうなりゃ！おら口開けろ！」
「やだぁ、それだけはングッ」
　隠れて切り落とした足鬼の腕を喰らい、肉体を強化した後に隠していた日輪刀を拾って鬼に相対する。
　［能力名【怪力】のラーニング完了］
「ぎひひ、やっと目の前に表れたなクソガキ、喰い殺してやる。」
「・・・・・・」
　腕鬼は、細長い、まるで足のない百足のような尾を足鬼の口に突っ込んでいた。そして足鬼は、それに抵抗するそぶりも見せずに白目を剥いている。気絶しているようだが、足は動いているし、再生した腕は腕鬼を支えている。
「邪悪だな。兄弟の兄を食い殺し、弟が鬼になっているとはいぇ、その兄になりすますとは。強さはともかく下衆さは鬼の中でも上位に入るだろう」
「はぁあ？なりすましたんじゃねぇよ、勝手にこいつが勘違いしているだけだぜ。それに、強さはともかくぅ？とかほざきやがったな？それはこの足野郎が文字通り足を引っ張っていた時の話だろ？今の俺は一味違うぜ。おめぇに今みせてやらぁ」
「・・・・・・」
　鬼が拳を振りかぶり、殴りかかってくる。
　早い。肩車とは思えないほど予備動作が短い。鬼化状態でなければ避けられなかったかもしれない。
　肩車の状態で、二人分の体格と巨大な四肢を持っており、まるで体長四メートルの一人の巨人のようだ。一般人であれば一瞬で挽肉だろう。
　しかし、今の俺の身体能力は常人の比ではない。
　避け続け、隙を見せるのを待つ。巨大な四肢を持つ巨体の鬼だ。攻撃範囲がかなり広く、避け切れない時もあるが、多少の掠り傷は鬼化状態で強化された【治癒加速】で誤魔化す。
「見えたッ」

相手が隙を見せたその瞬間に、足鬼の口に突っ込まれた腕鬼の尾を断ち切る。
「うわッ、ぐうぅわッッ！」
「う～む、ごもごも…むぐ？」
腕鬼の尾を斬り落としたところで、バランスが崩れ、気絶した足鬼が腕鬼を支えることもなく、腕鬼は足鬼の肩から落っこちた。
およそ一メートル半上から、頭からの落下。鬼の身では首も折れないだろうが、それでもその衝撃は腕鬼をふらつかせるに十分だった。
そこに、鬼化し【怪力】もラーニングした俺が蹴撃をかまし、首を両手で引き千切る。
「グギャガガァ、足イ、助けろぉ！お兄ちゃんが死にそうだぞぉ！」
しかし、それを聞いた混乱状態の足鬼は、頭の無くなった腕鬼の体を蹴っていた。
「よくぼ、よくぼおにいぢゃんを!!!おもいだしたぞ!!!おまえはおにいちゃんじゃない!!!」
腕鬼の首を体がいる方向とは反対方向に放り投げ、蹴り続けている足鬼に相対する。
「同情はするが、お前ももう鬼だ。黙って食われてくれ」
自分に注意を向けていない足鬼に、不意を突いて捩じ切り、引っこ抜く。
「う、ぐぅぅぅぅ」
足鬼の体から首を遠ざけて、足鬼と腕鬼の体を切り刻み、再生を妨害する。その後足鬼と腕鬼を地面に埋めてから鬼食いに入る。鬼食いは安全を確保した後にしなければ。
［能力名【巨大腕】のラーニング完了］
［能力名【巨大脚】のラーニング完了］
［能力名【肉体操作権奪取】のラーニング完了］
二匹の頭を掘り起こし、それも食らう。鬼共は体から伝わってくる激痛で、息も絶え絶えのようだ。
［能力名【悪鬼の尽きぬ体力】のラーニング完了］
・・・疲れた。

《三日目》～《五日目》

《三日目》

戦闘と鬼食いで夜が明けてしまった。

炭治郎と合流しよう。鬼の行動が制限される昼のうちに鬼の住処を見つけて襲撃したいが、俺は探知能力は無いに等しい。名前を呼びながらうろうろ歩き回ってみるか。

「おーい、炭治郎ー。炭治郎やーい。共闘しねぇかー」

うろつき回っているうちに夜になってしまった。それでも呼び続けていると、茂みから炭治郎が現れた。

「おぉ、炭治郎。頼みがあ……」

「悪鬼め、人間のふりをして名前を呼び、俺を食らうつもりだな！俺はお前に名前を教えた記憶はない。そもそもお前からは鬼の匂いがするぞ、特に口から。おおかた、共食いでもしていたんだろう！」

まずい。この世界の炭治郎が俺に名前を教えたことがないのは事実だ。鬼食いをしているため、鬼の匂いがするのも自然だ。どうにか誤解を解かなければ…

「待ってくれ、俺は人間だ！お前の名前を知ったのは最終試験前に話しているのを聞いたからだ。鬼の匂いについては…隊律違反になるので黙っててほしいが、俺は鬼食いをして身体能力を強化できる体質なんだ。見た目も人間だろ？」

「信用できない。証拠がない。見た目が人間とは言うが、暗くてよく見えないし、おそらく人間に化ける血鬼術でも使ったんだ。腰に差してる日輪刀も誰かから奪ったものに違いない」

まずい、相手の論理のほうが明らかに正しい。

こうなったら、アレしかない。

「なら、朝日が昇るのを待って、俺が日光に当たるのを見てくれ。それで無事だったら信用できるだろ？」

「……わかった。だが、他の隊士を助けるためにも、鬼を狩り続けなきゃいけない。お前にも手伝ってもらうぞ。共食いをしていたんだし、そのくらい平気だろう？」

「だから俺は鬼じゃ……まあいいか。鬼を食って鬼化状態になれば日光に当たると危険だから、お前に信用してもらうまで鬼食いはしねえ。俺は呼吸が使えないから、鬼化状態じゃなければあまり戦力にならないと思うが、それでいいか？」
「それでいい。探索や囮役、直接戦闘じゃなくてもやれることはあるだろう」
「探索はお前のほうが向いてると思うがな」
　そして炭治郎は鬼を狩り続けた。やはり炭治郎の鼻はすごい。ぽんぽん鬼を見つけて首を狩る。俺は一応囮役ということになっているが、囮が必要なのかは疑問だ。
　俺は鬼食いの必要があるから、日輪刀で首を斬り飛ばして塵にするとまずい。生きたまま食うしかないため、かなり面倒な手順を踏む必要があるんだ。
　炭治郎に限らず、他の剣士は雑魚鬼相手なら時間を掛けずに済むのだろう。
　しかし、炭治郎の俺に対する警戒の目線が辛い。鬼かもしれないと警戒する炭治郎の視線には慣れない。親しく思っている他者から疑われるということがここまで精神的に堪えるとは知らなかった。
「なぁ、炭治郎」
「なんだ。お前はできるだけ俺の後ろに立つなよ」
「ああ、うん……そうなんだが。お前、水の呼吸を使ってるんだってな」
「見ればわかるだろ。なぜそんな話をするんだ？」
「全集中の呼吸って、常にしてるか？」
　ここで炭治郎に強化のアドバイスをしておく。本来、炭治郎が全集中の呼吸・常中を習得したのは那田蜘蛛山で下弦の伍一派を倒した後の機能回復訓練時だと聞いている。炭治郎やその仲間が早く常中を習得しておけば、よりそれまでの戦闘が楽になるだろう。犠牲になる隊士も少なくなるかもしれない。そういったことを期待して話を続ける。
「全集中の呼吸？いや、戦闘時にしかしていないけど。それがどうか

したか？」
「実はな、全集中の呼吸を常にすると、基礎体力や筋力がとても高くなるらしい。全集中の呼吸・常中って技能なんだが。習得は容易ではないらしいが、試してみないか？」
「それをしたら即死するとかじゃないだろうな。師匠に指導してもらって、尋ねてみようか」
「頼む。それと、全集中の呼吸・常中のことを他の生き残った隊士にも教えてやってくれ。基本の技能らしいんだが、あまり情報共有がされていないようなんだ」
「なんでお前が頼むんだ？まあ、情報の裏が取れたら広めるよ」
　炭治郎と鬼を狩り続けながら――と言ってもほとんどは炭治郎が狩ったのだが――夜は更けていった。
《四日目》
　日が差してきた。日光を浴びているところを炭治郎に見せつける。
「ほら、これで俺が鬼じゃないってわかっただろ？」
　それを見た炭治郎が、いきなり土下座してきた。
「今まで君を疑って申し訳ない！失礼な態度をとり続けてしまったことも！謝る！」
「頭を上げてくれ。いいんだ、確かにあの状況では仕方がなかったからな。」
「ありがとう。恩に着るよ。鬼食いや常中についても信用するよ」
　炭治郎が頭を上げ立ち上がる。俺は彼に手を差し出して、彼と握手をした。

「俺の名前は不死川玄弥、よろしく」
「俺は竈門炭治郎……ってもう知ってるか」
「ところで相談なんだが、俺は鬼食いをして強くならなきゃいけないんだ。お前の鼻を頼りにこれからも一緒に鬼狩りをしないか？俺の鬼食いに協力してくれると助かる」
「鬼食いか。それって生きたまま鬼を食べるんだろう？それは可哀想だ。素早く首を切って楽にしてあげた方がいいと思うんだけど」

「いや、でも相手は鬼だぜ？人を食ってるんだから食われても文句は言えないだろ。それに、俺が強くなればより多くの人を助けることもできるんだ。しかも……」

俺の能力や経験の説明も含めて説得していく。一個体でできることには限界があるのだ。いくら俺が転生者であるというアドバンテージがあるとはいえ、それを活かせないと意味はない。仲間の協力によりさらに強くなり、より強い鬼を狩れるようにならなければならない。

「うん、わかった。納得はできないけれど必要なことは理解できた。俺は君に協力する」

ようやく納得してくれたようだ。早速鬼食いのために鬼を探す。すぐに見つかった。というか炭治郎がすぐに見つけてくれた。木の洞で日光を避けていたようだ。

［竈門炭治郎は戦技（アーツ）【打ち潮】を繰り出した］

何か変な音声が脳裏に響いたが、考えるのは後だ。炭治郎が鬼の胴体と右腕を素早く切り落としたため、俺が落ちた部位を食う。

［能力名【悪鬼の因子】のラーニング完了］

［能力名【飢餓暴走（ハンガー・バーサーク）】のラーニング完了］

脳裏にその能力名が響いた瞬間、俺は咄嗟にその二つの能力をオフにした。

明らかに危険そうなアビリティだ。前者についてはよくわからないが、後者はおそらく鬼の飢餓状態の暴走がアビリティになったものだろう。きっとこれは永久にオフにしておくべき能力だ。

特筆できる特徴のない男性型の鬼だったが、使える能力はラーニングできなかった。

しかし、自分で傷をつけてみたところ、傷の再生速度が上がっていた。以前の鬼化状態よりも幾らか再生速度が速かったのだ。

おそらく、俺は鬼食いをすればするほど、アビリティの強度も上がっていくのだろう。これにより、いくら鬼食いをしても無駄ではないことが分かった。

炭治郎と鬼を狩り、食らい続ける。とはいっても主に狩るのは炭治

郎であり、俺は主に食ってるだけだ。偶に鬼の体の切断に力を貸すくらいでしかない。
夜も更けてきたが鬼狩りの手は止めない。できるだけ多くの鬼を殺さないと、それだけ隊士候補者に被害が出る。鬼食いで速度が遅くなっているから、その分頑張らなければ。炭治郎が。
［能力名【石の体】のラーニング完了］
鬼化中は肉体強度や膂力が向上するが、精神的には好戦的になり、人食い衝動も多少湧き出てくる。
覚悟していれば大したことはないし、アビリティとしてはオフにしているので精神的な影響も大したことはないのだが、それでも精神衛生上あまり良くはない。
鬼化のブースト無しに、アビリティを十全に振るえるようになりたいものだ。
《五日目》
そんなことを考えつつ鬼食いをしていると、夜が明けた。
「ぜぇ、ぜぇ、はぁ。そ、そろそろ休まないか、玄也。もうお腹いっぱいじゃないか？」
「いや、全く問題ないが。まあ鬼も少なくなってきているし、日中は休んでもいいんじゃないか？」
「ありがとう、そうさせてもらう……」
炭治郎は地面に突っ伏しそのまま寝てしまった。無理をさせ過ぎたようだ。この時の炭治郎の体力の限界も知れたし良いだろう。
俺も休もうかとも思ったが、炭治郎にのみ鬼狩りを任せすぎて、俺は体力を消耗していない。山を歩き回った疲労が無いとは言えないが、鬼化による肉体強化もあり、ほぼ万全の状態である。
しかし、炭治郎がいないと日中は碌に鬼を見つけることができない。
仕方ないので、アビリティについて確かめることにした。
【飢餓暴走】については危険しか感じないので放置しておく。
まずは【巨大腕】【巨大脚】、これは発動すると、ミキミキと骨肉がきしみ、どこぞのマッチョマンのように腕や脚が太くなり長くなる。

非鬼化状態だと、腕や脚の長さが１０～２０㎝程伸び、太さは細い丸太と同程度に大きくなる。
もちろん筋肉量も増えるため、単純な筋力増強アビリティとしても使えるだろう。ただし身長や腕の届く範囲が異なるため、慣れが必要だ。常にオンにしておくことにする。
そして【肉体操作権奪取】、これを発動すると、傷口や粘膜から蚯蚓のように神経の束が這い出てくる。
指の爪の間から生やしたこれを適当に捕まえた鼠の尻穴にぶっ挿すと、多少の抵抗があった後、鼠が気絶し一挙手一投足を操れるようになった。視界の共有もできるようだが、アビリティ強度が低いのか、ぼんやりとしか見えない。聴覚や嗅覚、触覚についても同様だ。鼠の場合だと、肉体の構造が違うため動かすのにかなり苦労した。
感染症にかからないようにアビリティによって作られた神経の束は戻さずに切り落とした。
相手が鬼や人間、強大な生物の場合だと、肉体を乗っ取るのもおそらく難しくなるのだろう。それでも、鼠も抵抗の際に苦しそうにしたり、僅かに腕だけ動かせたりもしたので、完全に乗っ取ることができなくとも攻撃や行動妨害の手段として使えそうだ。
次は【悪鬼の尽きぬ体力】、特に肉体に変化はないが、非鬼化状態でもランニング程度であれば息切れもせずに走り続けられる。ただ、全力疾走を数十分続けると、流石に脇腹が痛くなってくるようだ。
【悪鬼の因子】、危険だと思うが、内容が不明だ。知らなければ、知って鬼への対策をしなければならない。
アビリティを発動する。すると、腹が空いて人肉を体が欲するようになる。それと、自分のその衝動への嫌悪感も薄くなるようだ。他者への攻撃性も高くなっているような気がしなくもない。短期的には耐えられるし理性も持つが、これを何か月何年もオンにしておくと理性も溶けてくるだろう。すぐにオフにしておく。
この感覚を鬼は常に受けているのか。少し鬼に同情が湧くが、しかし今のところ殺すしか選択肢はない。珠世さんは鬼を人間に戻す薬を作れたらしいが、それも濃度の高い上弦の血液を採取して実験に

使った結果だ。今は無理だろう。

話がズレた。そして最後は【石の体】、単純に肉体が硬くなる、という効果だ。動きが鈍くなる、関節が固くなるなどということもなく、単純に攻撃に対して強くなる。動く岩のようになる、というほうが表現としては正確か。

まあ、非鬼化状態であれば軽石程度の強度しかないし、すぐに傷が付くようだ。

アビリティの実験がちょうど終わったタイミングで、炭治郎が目覚めた。もう夕暮れだ。

「う～ん、疲れは取れた。鬼狩りにいこうか、玄也」

「おう」

しかし、なかなか鬼は見つからない。もう藤襲山に鬼はいないのだろうか。

「う～ん、匂いからすると痕跡はあるんだけど……なかなか姿を表さないなあ」

「残り一匹か？」

「多分」

探索は無駄になり、夜は明けた。腹が減っているので、鬼ではなくそこら辺の魚を取って食うことにする。

川を探して、そこから刀を銛のように使って取る。

「火の番は炭治郎が頼む」

「わかった、俺に任せてくれ。得意なんだよ料理」

「知っ……そうなのか。じゃあ任せる」

炭治郎が調理してくれた焼き魚を食べる。

［能力名【エラ呼吸】のラーニング完了］

なんとなく、予想はしていた。

この、微妙に、しかし本質的に変わった世界では、俺の能力も変化しているのではないかと。

《六日目》

《六日目》

魚を、ただの魚を食ってアビリティを得た。

それは、おそらくどんな生き物でも、いや、もしかしたら非生物でさえも食える、食ってアビリティを得られるということ、かもしれない。

それは、人を食って強くなれる、という意味でもある。

俺は全集中の呼吸を使えないが、呼吸を使える隊士を食えば使えるようになるのでは、と思ってしまう。

別に殺す必要はない。鬼に隊士が殺されるなんて日常茶飯事だ、埋葬したふりをして死体の一部を口に入れればいい。

しかしそれでも、鬼になっていない人を食うというのは抵抗がある。隊律違反という意味ではない。鬼食いも隊律違反だ。だが、そうではない、人間の本質的な倫理に反しているような気がしてならないのだ。鬼がただの殺人集団だったらここまで鬼殺隊の怒りは買わない。言葉が通じるのに、元は同じの存在であるのに貪り食い死体を損壊する。それが禁忌だからこそ鬼は憎まれ忌み嫌われるのだろうし、俺もその一人だ。

だから、人は食わないことにする。まあ傷口を舐めたり髪を食うくらいなら許されるかもしれないが……

まあそんな悩みを除けば、鬼以外の生き物からもアビリティを得られるというのは朗報だ。

ただ、鬼食いで通常の栄養は取れないようで、異様に腹が減っていたためかなりの量の魚を食べた。それでたった一つしかアビリティが取れないということは、生物の大きさや強さでアビリティの取得数が異なるということかもしれない。

「炭治郎、お前の鼻を漁にも活かせないか？できるだけ大きな魚を獲ってくれ。薪拾いと火の番は俺がやる」
「どうしたんだ急に？一匹一匹は小さいといえ、かなりの量の魚を昨日獲っただろう？ここは鬼が徘徊しているし、鬼殺隊の管理下にあるから一般の漁師は入れない。だから簡単に大量の魚が獲れるんだ。それで十分じゃないか」
「どうやら俺の体質は鬼食いだけではないらしい。」

炭治郎に、能力について説明する。人食いについての俺の選択についても話す。強者の髪や血があれば譲ってほしい、とも。

「玄弥、君の能力についてはわかった。協力するよ。だけど、どうしてそこまで自分のことを教えてくれるんだ？」

それは、未来でお前のことを知っているからだ。お前が禰豆子を背負って戦っていることも、下弦の伍討伐に貢献し、柱の助力があったとはいえ、下弦の壱と上弦の陸、上弦の肆の首を斬って討伐したことも。そして、お前が鬼にさえ慈しみを抱ける優しい心の持ち主だということも。

だけどそれを言っても信じてはくれないだろう。だから、

「お前の才能に期待をしているからだ。それに、協力者がいないと強くなるのが難しい」
「うん、納得はできないけれど、そういうことにしておこう」

異様に勘が良い炭治郎だが、どうやらスルーしてくれたようだ。有難い。

炭治郎が魚を捕っている間に山をうろつき薪拾いをする。その間に木々の枝や葉を食べてみる。小さい木ではアビリティは手に入りそうにないので、それは薪のために取っておき、樹齢数百年はありそ

うな巨木を探しては枝葉や根を取って口に入れてみることを繰り返す。

［能力名【光合成】のラーニング完了］
［能力名【養分吸収】のラーニング完了］

およそ危険そうなアビリティ名でもないので、発動してみた。
【光合成】では体の表面が痒くなり、その後緑になった。太陽の光が普段より心地いい感じがするが、あまり普段と変わりはない。発動を解除すれば数十秒で肌の色は元に戻った。
【養分吸収】では、手足の指などの体の一部が針のようになり、それを生き物や地面に突き刺すと腹の減りがすこし収まる。炭治郎の捕った魚に刺したら数分で栄養のなさそうな干物のような見た目になった。ちなみに、食べてもおいしくはなかった。

アビリティを強化するため、樹齢の高そうな木々の葉や根を食べつつ、薪を拾う作業を終わらせた。

「これで魚由来の新しいアビリティが手に入れば俺の戦力が強化できる。炭治郎、焼く作業は頼む」
「ああ、わかった！」

火加減をしながら魚を焼く炭治郎を眺める。前の世界で無限城の上弦の壱に殺されたときは、炭治郎の死の知らせはなかった。だが、その後はどうなったのだろう。無惨に鬼殺隊全員が殺し尽くされたのだろうか、それとも無惨を滅ぼして大団円だったのだろうか。
後者であってほしいが、そんなことを考える意味もないだろう。俺が今生きているのはこの世界なのだから。

そんなことをぼんやりと考えていると、魚が焼きあがったようだ。
「玄弥、できたよ。自分でいうのもなんだけど、凄く良く焼けている」

こんがりと焼きあがった表面にふんわりとした白身、塩があれば最高に美味しく食べられるだろうと後悔する焼き上がりだが、塩がなくとも口に入れた瞬間に魚本来の旨味が広がる。「ジューシー」という表現がもっとも的確だろう。

［能力名【逆流遡行の心得】のラーニング完了］

名前からして、逆流に抗して泳ぐ為のスキルだろう。今は服を濡らしたくないから泳いで試しはしないが、いつか使う時が来るかもしれない。

口に入っている魚を飲み込んで話しかける。

「もぐ、んぐ。もうすぐ最終選抜試験が終わる。炭治郎、これで俺たちもようやく正式な隊士だぜ」

「玄弥、まだ後一晩あるんだ。気を抜かないでくれ」

「そうだな、すまん。気ぃ張っていこうぜ。たしか、後一匹だっていう話だったよな」

「ああ、匂いとしては後一匹なんだが、匂いが強いところを探してみてもどうも見つからないんだ」

ふむ、確かに妙だ。炭治郎の鼻でも見つからないとなると、何か特殊な能力を持っているのかもしれない。

「なあ、匂いが強いところで何か変わった、奇妙な点はなかったか？」

「う～ん、あ。コケが生えている地面に腰くらいまでの小さい木が一本生えていたのが見慣れない風景だと思ったんだ」

コケというものは日陰で育つものだ。地面にそれが生えていたということはその場所は日光が当たらない場所だということだ。そして光合成をする木はふつう、日光のないところには生えない。そこに生えていたというその木は・・・・・・

「炭治郎、それだ！それが鬼だ！その木はどこにあったか？もうすぐ日が沈む。先日の夜の内に潜む場所を変えていなければいいが」

「木に化けているということがわかれば問題ない。少し匂いを辿ればすぐ見つかる」

鬼の匂いを探す炭治郎の後を歩き続け、日が完全に沈んだ頃、少し

開けた場所に出た。
「鬼の匂いがうっすらとこの近くからする。息を整えてから行こう」
炭治郎の意見に従い、近くの一際大きい大木に背をもたれかけて休もうとすると、その木から生えた枝が俺の腹部を貫いた。
「なッ、玄弥!?」
炭治郎が咄嗟に振り向き刀を抜く。しかし炭治郎と俺とは数十メートルほど放れており、即座に助けられるほど近くはない。
木の瘤が人の顔のようになり、口に当たる部分が蠢いて声を発する。
「おまえぇ。額に傷がある方の人間だぁ。こいつの命が惜しければ刀を捨てろぉ。頭をぶすりと貫くぞぉ。おめぇがそれなりに強い剣士だってのはわかってるんだぁ」
しわがれた声でそう言いながら、その木・・・・・・いや木のような姿に擬態した鬼が俺の体を太い枝のようなもので拘束する。
鬼化状態ではないアビリティと肉体ではこの拘束を逃れることは難しい。
だから。
「うぎゃあああ!助けてぇ!この声が聞こえたなら麓にいる強い剣士の人助けに来てぇモゴォ」
「うるしぇぇ。人質戦法が効かねぇ強い剣士が来たらどうすんだぁ。俺殺されちまうよぉ」
木の鬼は俺を黙らせるために口に太い枝を噛ませた。
そして俺はその木を噛み千切り嚥下した。鬼化が発動する。どうやら食感からして木の中に鬼の肉が神経のように通っていたようだ。
アビリティが強化される。【巨大腕】と【巨大脚】が強化され、少し太め程度だった俺の四肢が女性の腰ほどに太くなり、身長も１８０ｃｍほどから二メートル半ほどの巨人になる。【怪力】が強化され、人間重機という表現がふさわしい力を発揮し枝の拘束を引き剥がし、木の鬼から離れて炭治郎のそばまで引く。【治癒加速】で腹の穴も視認できる速度で塞がっていく。
「なぁ、なにぃ。おめぇも鬼かぁ。いやちげぇなぁ。枝が肉ごと噛み

千切られてる。【魔喰の戦士】って奴かぁ。くそぉ。俺の命運もここまでかぁ」

「ま、まくいのせんし？何を訳のわからないことを言っているんだ？」
「この霊樹様に寄生して乗っ取った時に得た知識よぉ。数百年前の埃を被った知識だが、この世界には職業があるって話らしいぜぇ」
「いや、世界に職業はあるだろう。俺の家は炭焼き屋だ」
　炭治郎がいきなり訳のわからないことを言い出した木鬼・・・・・・
鬼の話によれば霊樹に寄生した寄生鬼に突っ込む。
「そういう話じゃねぇ。世界の仕組みの話だぁ。世界の始まりから組み込まれてるんだってよぉ、人間への加護としてなぁ。人間の能力や身分を表す職業じゃねぇ。それそのものが人間に能力や身分を与えるんだぁ。職業という名の［力］そのものなんだよぉ」
　鬼は続ける。妄言として無視し、殺しにかかってもいいが、それにしては真実味がありすぎる。この世界と前の俺がいた世界との差異についての話だ。脳裏に声が流れたり、鬼喰いの結果がアビリティとして具体化したりするという現象。そんな人智を超越した存在の意志が介在してそうな現象を俺は体験したのだ。ほかにもそういった現象や法則があったとしてもおかしくはない。
「で、その「職業」という名の力、加護つってもいいんだろうなぁ。それは生まれつきだったり、何かの条件を満たすことで獲得できるらしいんだがなぁ。その一つに【魔喰の戦士】ってのがあるんだぁ。特徴としては鬼のような尋常じゃない生物を食うと同じく尋常じゃない力を手にできるって奴だぁ。手足がバカでかくなる能力はなかった筈だがそれについては知らねぇ」
「で、それをなんで俺たちに教えたんだ。俺たちは鬼狩りだぞ？」
　正確にはその候補だが。
「寿命なんだよぉ。鬼には寿命はねぇって言われるが、鬼と木が融合した謎生物ーーー鬼樹とでもいうかぁ。この種族はその限りじゃなかったって訳だよぉ。俺ぁこの牢獄じみた山にぶち込まれて、共食いしたり色々鬼の能力を試したりしてたら寄生の能力を手に入れた訳

だぁ。それでこの霊樹様に寄生を試みて、抵抗もなく楽にいったんだが、居心地が良すぎて長居しすぎたら寄生どころか木と一体化しちまったんだよぉ。鬼としても変質しちまって寿命も短くなったところに、霊樹様の老いがドカっと来ちまったぁ。寄生の抵抗がなかったのはもうヨボヨボだったからってことだぁ」
「じゃあなぜ俺を刺した。お前はもうすぐ死ぬんだろ？」
　疑問が口を突いて出る。こいつのとぼけた口調が原因か、口が軽くなっているようだ。
「死ぬ前にあわよくば一口って思ったんだよぉ。最後の晩餐って奴だぁ。口も無くなったから根で一吸いってとこかぁ。まあその望みも叶わねぇがなぁ」
「そうか、なら逆にお前を俺が喰ってやる。人喰い鬼の最後としてはお似合いだなァ」
「おいおいぃ。鬼に違わなぬ凶暴な面じゃねぇかぁ。ああ、俺の種がそろそろ生えてる筈だ。そいつを外に連れて行っちゃくれねぇかぁ？元鬼の俺と違って食人衝動がある訳でも人の味を覚えてるわけでもねぇ。生まれつきの鬼樹だからなぁ」
「そうか。そいつが人を喰いそうだと判断したら殺す・・・・・というか伐採するぞ」
「かまわねぇ。さぁ、一思いにやってくれ。鬼樹は鬼と違って太陽の光で消滅することもねぇ。日輪刀でもおそらく同じだろう。さぁさぁ、さっさとぶった切れ」
　そういって木の瘤の顔は消えた。鬼から違う存在に変異することなどあるのだろうか。鬼は元は人だから人に戻るのはわからなくもないが、鬼が木と一体になるなど、考えがたい話だ。俺がこいつを食って鬼化したと思ったが、一時的に鬼になったというより、【魔食の戦士】とやらの能力で魔化したという方が正確らしい。
「炭治郎。俺も剣士の端くれではあるつもりなんだが、この太さの木を斧も無く両断するのは俺には無理だ。何から何まで迷惑を掛けてすまないが、やってくれないか」
　この最終選抜試験後半、俺は本当に炭治郎に頼りっぱなしだった。

鬼食いの世話から魚の調理まで。強くなるなどと言いながら文字通り食べさせてもらっているだけだ。食べることで能力が手に入るから、それで強くなって鬼を倒すからなどと言いつつおんぶにだっこである。臑齧り極まりない。
「ああ、もちろん」
炭治郎は日輪刀を抜き、躊躇無く振るった。
［竈門炭治郎は戦技【干天の慈雨】を繰り出した］
また脳裏に音が流れる。これもおそらく世界の仕組みとやらなのだろう。
「なぁ、炭治郎、型を使った時に音声がなったりしないか？」
「そんなことはないけれど。玄弥だけじゃないのか？うわぁ、すごい年輪だ、ほとんど真っ黒じゃないか」
音声についてはおそらく炭治郎の言うとおりだとして。俺も倒れた木の年輪をみてみると、確かに真っ黒だった。ほかの色は中心に細く肉の部分があるだけだ。この大きさでこの年輪ということは、生長が非常に遅い種だったのか、それともある程度生長してその後縮んだのだろう。
この大きさの木を食べきるのは俺の歯と胃腸を以てしてもかなり時間がかかるだろう。とりあえず持って帰りたい。枝葉を落として食べ、切り株は掘り起こして炭治郎に持ってもらえば魔化状態の筋力であればなんとか持ち帰れる筈だ。
だがその前に。
「こいつが言ってた生え立ての鬼樹を探さないか？匂いはまだあるか？」
「大丈夫。そもそもこの木には鬼の匂いはしなかった。鬼の匂いの元であるこの肉の部分は太い幹に囲まれていたから。幹の部分が細い生え立ての鬼樹の匂いはちゃんとここからでも匂う。今気づいたけど、鬼樹と鬼の匂いは若干違うんだ」
と言って歩き出すのでついて行く。数分でそこに着いた。
そこには、コケに囲まれた腰ほどの高さの木があった。
だがそれは闇夜の中で名状しがたく蠢き、うねっていた。

「うわっ。うわっ」
二回も驚いてしまった。
驚いているうちに炭治郎が周りの土ごと掘り起こして布に包んでいた。うねりは多少小さくなったが布越しでも見える。
炭治郎の度胸に関心しながら大きい方の鬼樹の方に戻り、枝葉を払って食べる。
［能力名【枝葉操作】のラーニング完了］
［能力名【気配隠蔽】のラーニング完了］
［能力名【木を隠すなら森の中】のラーニング完了］
枝葉を食べながら、鬼樹の切り株を掘り起こし、切り株を背負い枝葉を落とした幹を背負って山を降りた。炭治郎が持とうとしてくれたが、これは俺の食事なので自分でもつことにしている。
これでようやく、最終選抜試験も終わりだ。炭治郎が浅草で無惨と遭遇する時までに強くならないと。確実に仕留めるために。

《七日目》

《七日目》

山を下りる。鬼殺隊最終選抜試験会場である、この藤襲山を下りる。つまり、最終選抜試験もようやく終了であるということだ。ようやく終わるという思いと共に、まだ足りないという気持ちもある。足りないというのはつまり、鬼喰いが足りないということだ。

最後の一回、あの鬼樹に腹を刺された時を除き、大した負傷も無く鬼を喰らえた。ローリスクでハイリターン。楽にアビリティを強化できた七日間だった。記憶が目覚めたのは一日目の夜なので六日間と言った方が正確かもしれないが、とにかくそういった期間だったということだ。数人しか人を喰っていない脆弱な鬼、しかし無惨から一応血を分け与えられてはいるのでそこそこのアビリティ強化源にはなるという食料が大量にいたあの山はボーナスステージのようなものだったのだろう。

しかし、今からはまともに人を喰っているーーーーーー人喰いがまともな行為という意味ではないーーーーーー鬼と戦わねばならない。鬼は基本的に人を喰うほど強くなるため、藤襲山の鬼のように「飼われ」ていない野生の鬼との戦いはそんなに易しいものではないだろう。鬼と遭遇する回数は減るだろうが鬼の質は飛躍的に上がる。

まあ、だからというわけではないが、今まで以上に集中しなければいけない、ということだ。

そんなことを考えながら鬼樹の枝葉を食べている、というかスルメのようにしゃぶっている。

いやそれにしてもこれ美味いな・・・・・程良い歯応えの木の繊維と肉のうま味が絡み合っている。鬼の肉というのはアクが強すぎて美味いとはとてもではないが言えないのだが、鬼樹の枝の味はだいぶさっぱりした風味だ。霊樹と合一して肉の部分も変化したことが反映されたのだろう。葉の部分は肉の味が染みているが食感はパリパリしており、スナックのようだ。

［アビリティ【肉木融合】のラーニング完了］

このアビリティを使うと、適当な普通の木の枝に指を絡めると枝と指の肉がベタっと張り付いて一つになった。【枝葉操作】を併用すると普通に指を動かすこともできた。アビリティを再度そこに使用すると、指の肉との張り付きは無くなったが枝の形は元に戻らなかった。

あ、そういえば。

「おーい、炭治郎」

「な、ん!?顔に、木がくっついた!?敵の攻撃か？」

「いやすまん、俺のいたずらだ。今外すから」

振り向いた炭治郎の顔面に枝を乗せてアビリティを使用したのだ。これで同意の無い他者にも【肉木融合】のスキルが使用できることが明らかになった。おそらく人間以外の生物にも使用可能だろう。色々な応用が頭の中を巡るが取り敢えず炭治郎の顔から木の枝を外す。

「最初に聞いた時は半信半疑だったし、肉体の変化や怪我の癒える早さは呼吸で再現できそうだからそこまで異常だとは思わなかったけど、こうして肌でその能力を実感するとやっぱり人には真似できない異能だと思う。ああ、もちろん悪い意味はないけれど」

「悪い意味を込めずにいてくれてありがたいもんだが、鬼のような再生速度や骨格レベルの肉体変化はさすがに全集中の呼吸じゃ再現できないと思うぞ。くっつくのは糊と変わらないし、異能というほどじゃない」

もちろん剥がれにくさは糊の比ではないが。文字通り一体化しているのだ。剥がすとすると肉の部分ごと剥がれ、それはそれは酷いことになるだろう。

そんなことを話している内に。

「お、広場が見えてきた」

山の麓、集合場所の目印である広場だ。そこにはもう何人か集まっていた。８人ほどに見える、前の世界よりは生き残ったようだ。

目立つのは黄髪の何かぶつぶつ呟いている少年である。そう、みなさんご存じ我妻善逸くんだ。いや、みなさんとは言ってもこの時、顔

は知ってるが名前は知らない、という程度の仲なのだが。
「おい、善逸」
　呼びかけてみる。
「え、俺!?何か身長六尺半はありそうな顔付きが凶悪な大男かっこ極太丸太持ちかっことじるに話しかけられてるんだけど！しかも下の名前で！教えた覚えないのに！ヤバいよこいつなんなんだよ明らかにヤバいのに目を付けられちゃったよ！」
「どうもかっこ極太丸太持ちかっことじるだ。よろしくな」
「ノリは良さそう！」
　前は「巨大脚」のアビリティを使っても六尺（１８２ｃｍほど）の身長しか無かったのだが、ずっと使い続けてる内に伸びたようだ。このまま伸び続けて天を突く巨人になっても困るので、六尺半程で留められるようにコントロールを習得したいものだ。
「極太丸太持ちこと不死川玄弥だ、みんな、よろしく」
　他の隊士候補にも向けて自己紹介したが、疲労して声も出せなかったり、憔悴した表情で反応がなかったり。つまり大した返事は無かった。
　極太丸太ネタも通用しなかったので、鬼樹の丸太を地面に下ろす。
「これで全員のようですね。皆様、お疲れさまでした。これで鬼殺隊最終選抜試験は終了です。あなたたちは正式に隊士となりました」
　黒髪おかっぱの少女、否、女の装いをした少年・産屋敷輝利哉が感情のない笑みでそう言った。
　少年の隣にいた、全く同じ格好の白髪の少女が続けて言う。産屋敷輝利哉の娘の四人は区別がつかないので誰かはわからない。
「正式な隊士として必要なものは、階級の入れ墨、鎹鴉、隊服、そして個人の日輪刀です」
「すべてこちらで用意いたします。ただし隊服は採寸、そして日輪刀は鋼を個人で選んでもらう必要があります」
「入れ墨は特殊な彫りをしており、通常は目に見えません。拳を握りしめ、筋肉を膨張させながら「階級を示せ」と言うと今の自分の階級が浮き出ます。つまり、階級が上がると自動で入れ墨も変化します。

階級は癸から甲の十干で表されます」
「鎹鴉は連絡用の鴉です。知能が高く、人の言葉を覚え、話します。あなた方の相棒でもあります」
「隊服は戦闘服も兼ねています。耐刃耐火防水通気性に優れていますが、上級の鬼はそれを難なく貫きます。決して過信なさらぬように」
「日輪刀は色変わりの刀の異名を持ち、最初に鞘から抜いて握った人に合わせて色と性質が変わります。色は呼吸の適正に合わせて変わると言われます。どの呼吸がどの色になるかはご自分の育手にお聞きください」
少年と少女が質問を挟む間もなく交互にそう言った。言い切った。
だが、俺と炭治郎以外の人間は耳を少しも傾けていなさそうだった。善逸は俺を無駄に怖がってぶつぶつ言ってるし、カナヲーーー蝶の髪留めをした生存者唯一の女子ーーーは事前に聞いてた風で全く気にも留めていない。残りの四人、前の世界では死亡していた奴らは前述の通り耳に入っていない。
流石にそれはマズいだろう、ということで。精神的・肉体的に疲労して座り込んでいたり地面に突っ伏してたりしている四人を一つの場所に引きずって運ぶ。
「お、おい、何すんだよ・・・・・・」
口では抵抗しても体は大して抵抗しない。やはり疲れているのだろう。
「ふう、良し。復唱!」
「な、何のことだよ」
四人の内の一人、長髪を後ろに纏めている男が尋ねる。他の三人は口を閉ざしたままだ。
「今産屋敷家の方が仰った隊士に必要なものについてだ!この知識の有無で命に関わるかもしれないんだぞ。きちんと聞け!まずお前!階級の入れ墨とは何だ!」
尋ねてきた長髪の男を指さす。
「か、階級の入れ墨とは、階級を十干で表す入れ墨で、相言葉と握り拳で浮き上がる」

「良し！次、鋏鴉とは！」
右顎に傷のある丸刈りの男の方を向く。
「鋏鴉とは、えっと・・・・・・」
「鋏鴉とは、連絡用の鴉であり、人間の言葉を話す、我々の相棒である！復唱！」
「鋏鴉は、連絡用の鴉で人語を話す、俺たちの相棒・・・・・・」
「良し、次！隊服とは！」
縮れ毛の背の高い（今の俺よりは低いが六尺、１８０ｃｍほどある）男に聞く。
「色々性能の高い戦闘服？」
「まあ良し、次、日輪刀とは」
最後に肌が浅黒く彫りの深い、印度人風の男に聞く。
「コ、コレのこと」
印度人風の男が腰に差している刀を指さす。
「良し、まあいいだろう」
流石にやりすぎたか、とは思ったが、これはちゃんと覚えないといけない事項だろう。彼らのためだ。
そして、こういった形で教師役をすることで主導権も握れた。四人が疲労で異議や疑問を呈し辛かったこともそれに一役買っているだろう。
「玄弥、流石にやりすぎじゃないか？後で育手の人に訊ねればわかることだろう」
「いや、情報共有ができていないかもしれないし、そもそもこいつらに必要なことを訊ねる頭があるかも怪しい。ここで頭にたたき込んでおいた方がいいだろう」
主導権を握ること、つまりマウントを取ることが主目的だったなんて、炭治郎に言ったら叱られるだろう。
主導権を取るのに必死になって、産屋敷家の二人を待たせてしまった。鴉を顔合わせをし、鋼を選ばねばならない。採寸は「巨大脚」と「巨大腕」があるのでコントロールができるまで待ってもらうことにする。

「失礼しました。聞いてない奴らに言い聞かせるためですので、どうかお目こぼし下さい」
「お話は終わったようですね。それでは、まず鋏鴉を配布いたします」
肩に鴉が乗る。”ヨロシクナ、ヨロシクナ”と喚いている。羽根を一本抜いて食ってみるがアビリティは得られない。黄色い髪の誰かさんがスズメだのなんだのと五月蠅い。睨みつけると声が小さくなった。
「次に、日輪刀の鋼を選んで頂きます」
「あの、余った鋼は貰ってもいいですかね？」
食べたら何らかのアビリティが手に入るかもしれない。無機物から手に入るかはまだ明確ではないが、試してみる価値はある。
「余ったものは次の最終選抜試験のために使うのですが・・・・・・そうですね、一つならば良いでしょう」
やったぜ。
そしてここが要の刀選びだが、呼吸が使えずアビリティを駆使して今後も戦うだろう俺に日輪刀は大して重要ではない。せいぜいが止め用だ。なので適当に選ぶ。本気で選ぶならば五感の優れた炭治郎と善逸、そしてカナヲに頼んで選んで貰うのだが。まあその場合、カナヲは頼みを受けてくれるかわからないのだが。善逸？適当に脅せば問題はないだろう。
その後、小さい方の鬼樹を何かに役立ててくれ、と産屋敷輝利哉に渡した。俺（と炭治郎）では活用できないと判断したのだ。殺して食べるより有効な使い道を鬼殺隊研究部は見出してくれるだろう。
残りの四人に名前を聞いた。長髪は永井妙次郎、顎傷の丸刈りは濁沼同胞丸、縮れ毛の長身は尾頭震司、印度風の男はシャラク・アートマナンダと言うのだという。シャラクは、生まれはインドだがその後すぐに日本に来てそこで育ったので、インドのことはほとんど知らないしインドの言葉も話せない、ということらしい。
鋏鴉に顔合わせをさせて連絡が取れるようにしておく。
善逸を含めた五人に、”全集中の呼吸・常中を鍛えろ。詳しくは育手に聞け”と言い含めて俺は悲鳴嶋さんのところに、炭治郎は鱗滝さ

んのところに帰ることにした。炭治郎に持ってもらっていた鬼樹の切り株も貰う。

帰り道に鬼樹の丸太の木材部分の栄養を【養分吸収】で吸い取りつつ、【枝葉操作】で形状を操作し（枝葉を操作するためのアビリティで幹の部分を操作したのがいけなかったのか、非常に操作しにくかった）、普通の樹木における心材の位置にある肉の部分をひねり出して啜り喰った。味は渋くてあまり旨くはなかった。

［能力名【融合（フュージョン）】のラーニング完了］
［能力名【霊樹の旧世界智】のラーニング完了］
［能力名【一代進化（ワンジェネレーションエヴォルヴ）】のラーニング完了］

歩きながら【巨大腕】のコントロール訓練も行う。鬼樹の丸太は搾り滓になったので道端に捨てた。切り株は夜弁として食べた。

［能力名【根幹操作】のラーニング完了］

《八日目》

夜通し歩いて夜が明けた。鋭鴉は喚き声がうるさいので少し、いやかなり後方からついて来させている。持った丸太はもう【養分吸収】で完全に栄養を吸収されており、腹の足しにならない（アビリティで吸収した栄養が腹に行く訳ではないだろうが）。

なので残り滓と化した丸太は捨て、切り株の方を食べる。【根幹操作】で芯の部分の肉と外の部分の木部分を切り離し、前者は直接、後者は【養分吸収】で食らう。

枝の方の肉は旨かったのだが、根の部分の肉は非常に渋味が強く肉とはとても思えない。まあ鬼樹の肉という尋常ではない肉なので肉と思えなくて当然なのだが。えぐ味ではなく渋味なのである。渋柿のような渋味なのである。

［能力名【人間鑑定（アナライズ・ヒューマン）】のラーニング完了］

［能力名【龍脈探知】のラーニング完了］

［能力名【龍脈接続】のラーニング完了］

不味さに顔をしかめながら食い終わると悲鳴嶼邸に着いた。俺が継子となっている岩柱の家にして修行場、滝の音が聞こえる山の麓にある所である。

「不死川玄弥、鬼殺隊最終選抜試験をくぐり抜け、ただ今帰りました！」

ドタガチャパリンと家の中から音がした後、家の扉が開き、岩柱・悲鳴嶼行冥が表れた。

「よく、よく無事で帰ってきてくれた・・・・・受験の許可を出した私が言うべきことではないが、生きて帰ってきてくれてありがとう・・・・・・！」

と言って涙を流しつつ腕を広げ、抱擁を求めた。それに感極まって、俺はつい抱きしめた。抱きしめてしまった。

その瞬間、視界が逆転し、投げ飛ばされた、と思ったらうつぶせに組み伏せられていた。

「貴様は誰だ、玄弥はそのような背丈ではない！八日前はもっと低い

身長だった！それにこのような丸太のような腕でもない！」
炭治郎の時と同じだ、このパターンは。二度あることは三度あるというし、兄、実弥に他人呼ばわりどころか敵呼ばわりされると、いくら平行世界の兄とは言え心が折れそうだ。どう疑われるのだろうか、「俺の弟は鬼喰いなんてしねぇ、テメェはただの人に化けた共食い鬼だ」なんて言われたら無罪の証明ができないぞ。冤罪も甚だしいのだが鬼喰いをしていること自体は事実である。太陽の元に出ても禰豆子という前例がある。悪魔の証明ほど難しいことはないのだ。それにアビリティも使えるので、もはや自分が人間であるかどうかの自信すら無くなってきた。
などといきなりの出来事に思考が現実逃避を始めてしまったので、気合いで現実を直視し対処する。
「違います、俺は正真正銘の不死川玄弥です！信じてください！顔を触ればわかるはずです！」
岩柱、悲鳴嶼行冥は盲者である。そのため、個人の識別はふつう声色とその声の元、つまり口の位置から身長を逆算して行う。武器である鎖付き鉄球を持てばその音の反響で個人の位置や姿勢を判別できるという離れ業の持ち主ではあるが、それであっても肌の色や顔の貌のような細かい個人の特徴を判別できるようなものではない。最初の挨拶で俺を疑わなかったのは、扉越しで発声源がわからなかったからだろう。
しかし、顔を触れるような親しい間柄であれば、顔をさわり、手の触感で相貌を記憶し、判別できる。そして悲鳴嶼行冥と不死川玄弥は、この世界での今はまだ正式な師匠と弟子という関係ではないが、それでも呼吸の才能がない俺を鍛えてくれている、それなりに親しい関係だ。
彼は顔に触れ、手の感触を確かめる。揉んでつねったりもされる。痛い。いやそれ必要ある？
「確かに顔の貌は玄弥そのものだ・・・・・最新の技術という合成皮を被っているわけでもなさそうだ。しかし、まだ本人だというには疑わしすぎる。変身の血鬼術を持つ鬼もいると言う・・・・・・」

「いや、今は日が射してますし、俺が鬼なら燃え尽きている筈ですよね」
禰豆子という前例を今ここで口にだす必要はない。
「たしかに・・・・・・鬼ではないことは信用しよう、しかしお前が生きて帰ってきた不死川玄弥であることはまだ納得できない。もしお前が本物ならば、そのような身長になった事情を説明できるだろう」
これは鬼喰いの事実を告白するしかないようだ。いや、前から言うつもりだったのだが。
「隊律違反なのは承知の上ですが、鬼喰いをし、異能を身につけました。この身長もその結果の一つです」
「鬼喰い・・・・・・、君の言うことが真実なら、御館様の元に連れて行かねばならない。少し眠っていてもらう」
仰向けにされた直後に鳩尾に強い衝撃を感じ、俺は意識を失った。

目が覚めると夕日がまぶしい。俺は知らない屋敷の庭にいた。前世でも今世でも知らない場所だが、記憶を失う前の師のセリフからここが産屋敷邸だと推定できる。
あたりを見回すと、庭には俺をここに連れてきた張本人だろう岩柱・悲鳴嶼行冥（背負子を側に置いている）と、蟲柱・胡蝶しのぶがいる。
そして屋敷の縁側には鬼殺隊の長、産屋敷輝哉と思わしき顔の上半分が爛れている人物と、先日会ったばかりの産屋敷輝利哉、そしてその姉妹がいた。隠はいないようだ。
「君が不死川玄弥隊士だね？無理に連れて来させてすまない。目覚めてすぐで申し訳ないが、君に話さなければならないことがある」
産屋敷輝哉、御館様と呼ばれる鬼殺隊の長は開口して俺にそう言う。
「失礼ですが御館様、こいつが私の継子である不死川玄弥本人であるかはわかりません。気絶して四肢が収縮した不可思議な現象も、鬼喰いでは説明がつくかわかりません」

悲鳴嶼がそう疑問を呈すが、輝哉はこう返した。
「本人であるか否かについては〈わかる〉んだよ。私にはね。行冥も長い付き合いだ、私の力については感づいているだろう？そして四肢の収縮に関しては、しのぶ」
「はい。鬼喰い者についての資料はどれも伝承レベルで信憑性に欠けるものでしたが、その中の一つに〈鬼喰いの才が高いものは、鬼を食ってその血鬼術や異形を獲得できる場合がある〉とあります」
「うん、ありがとう、しのぶ。そしておそらくこれは真実だ。意識を失ったことで異形の維持が困難になった。これが四肢の収縮の原因だろう」
「説明ありがとうございます、御館様・・・・・・これで玄弥を安心して抱きしめれれる・・・・・・玄弥、すまない・・・・・・・！」
ぎゅうと抱きしめられる。圧迫で肋骨が折れそうな上に暑苦しい。だが、ようやく信じてくれたことの嬉しさの方が勝る。
「彼を離してやってくれないか、行冥。彼には説明しなければならないことがある。この世界の仕組みについて」
この世界の仕組み・・・・・・聞き覚えがある。あの鬼樹が言った言葉と同じだ。
「それは、『職業』のことでしょうか。御子息に渡した鬼樹の親の元鬼が言っておりました。奴の話は抽象的で理解し難かったのですが・・・・・・・」
「・・・・・・そうだね、その通りだ。その元鬼や鬼樹の話も聞きたいが、それは後にしよう。例えば、君は柱になる条件を知っているかな？」
５０体以上の鬼を殺すか、十二鬼月の一体を殺すかのどちらかを達成すれば柱として鬼殺隊から認められた筈だ。前世では必死に目指していたからよく覚えているが、この平行世界では違う可能性もある。
その旨を伝えると、輝哉は頷き微笑んだ。
「その通りだ、玄弥。だが、その条件を満たしたものは鬼殺隊から地位を認められるだけじゃない。世界から役割として『職業』、この場合は

【鬼殺し（デーモンスレイヤー）】とそれに付随する才能や能力が与えられるんだ。世界の仕組みを知らない者は、物事を達成した結果、壁を越えたとしか認識しないものがほとんどだけど、他者の『職業』を見抜ける者や、そうでなくても多くの者の成長を観察した者はこの仕組みに気付けることがある。鬼殺隊の場合は後者だね。僕の先祖が戦国時代に気付いて、その後前者の見抜ける者から鬼殺しのことを聞いて、これだと思ったようだ」

俺はおそらく見抜ける者にあたるだろう。まだ使ってはいないが、今朝【人物鑑定】を手に入れたためそれを使えばおそらく他者の職業がわかるのではないか。

ということも頭に浮かんだが、今の例えでそれより気になることがある。

「それなら、その情報を鬼殺隊の皆に共有すれば、より多くの人間の意欲が上がり、それらの一部が柱並の力を手に出来るのではないでしょうか」

「御館様の方針に異を唱えるとは・・・・・・我が継子ながらなんと愚かな・・・・・・」

「いや、良い視点ではある。だけどそれは難しいんだよ。戦闘系の『職業』が与える才能や能力というものは、多くが膂力や動体視力の類、つまり基礎的な肉体性能の向上であって、剣術などの肉体・武器操作の技量を直接向上させてくれる訳じゃない。技量が欠如したまま肉体性能だけ柱並になっても鬼は狩れない。すばやく動いたり巨体だったり、血鬼術を使ったりする鬼の首を正確に落とすためには、もちろん肉体性能も大事だけど、それよりも剣の技量が必要だ。何しろ首以外は切っても殴ってもほぼ意味がないんだから、強い攻撃を当てられるというだけでは使い物にならない。そもそも、『とりあえず雑魚鬼五十倒して『職業』を手に入れてから剣技を鍛えよう』という意欲で柱を目指されても死にやすくなるだけだからね」

わかりやすい説明だ。話上手なのだろう、つい聞き入ってしまう。

「教えてくださり有り難うございます」

「うん、ああ、話がそれてしまったね、これは例えなんだった。【鬼殺

し】に限らないように、世の中には幾千幾万じゃ数えられないだろう種類の【職業】がある。そしてその中の幾つかの獲得条件を僕は、というか産屋敷家は知っている。これはさっきも話した通り、隊員の技量修練の意欲を下げないために下級隊員には秘匿しているんだけど・・・・・君には教えなくてはならない。どうしてだかわかるかい？」

「俺が鬼食いをしたから・・・・・・ですか？」

「そうだね。正確には鬼食いで異能を身につけたからだ。刀しか戦うすべを持たない一般の隊士たちは、そこに全能力を集中して鍛え上げることが出来る。一所懸命という奴だね。だけど鬼食いの隊士は、剣技を疎かにして特殊能力を平行して鍛え上げたり、鬼喰いで基礎的肉体性能を伸ばしたがる、らしい。その結果、当然総合的な戦闘力は一般の隊士よりも高くなるが、対鬼のための戦闘能力は一般の隊士よりも低くなってしまう。だからこそ、総合的な戦闘力だけで鬼を圧倒できるほど強くなってもらう必要があるんだ。そのために『職業』獲得の条件を教える」

「その条件とは・・・・・・」

「ああ、その前にもう幾つか話さなければならないことがある。玄弥、体の力を抜いてくれ」

さすがにこの突然の要求には警戒をしたが、別に力を抜いたところで即死するようなことはないだろう。輝哉の言う通りにする。

『十遍回ってワンと言え』

輝哉の口から不思議な声音で命令形の言葉が発せられた。すると、体が何故か一人でに動き、十回でんぐり返しをした後「ワン」と言った。

蟲柱が笑いを堪えている。これは俺の意志でやった訳ではないから笑われる謂われは・・・・・・いやこれは俺が蟲柱の立場でも笑ってしまうな。

「おや、立ったままの回転（ターン）を想定していたんだが、でんぐり返しか・・・・・・まあ、それはいいとして。この世界には現実をねじ曲げる術が存在する。しかも鬼の血鬼術や君の鬼食いによる異能

に限らず、純粋に訓練によって獲得可能なものもある。これは【呪いの言霊】というんだが、そうだね。毎食前に一時間ほど訓練して五ヶ月だったかな。おおよそ四百五十時間ほどで身につけられた。言葉のわかる相手にしか聞かないし、本気で抵抗されると術の効果は解ける。特に相手が精神的強者であれば簡単にね。でもまあ役に立つかもしれないと思って手慰み、いや口慰みに身につけたんだよ。さて、これを秘匿している理由はもうわかるよね？」

今まで説明されたことと同じだとすれば、これだろう。

「術の修行にかまけることで剣の技量が落ちるから、ですか？」

「その通りだ。ちなみに全集中の呼吸・常中という技術も呪術の類ではないが下級の隊士には秘匿している。君は呼吸の才がないということだから、教えることはできないがね」

秘匿してたのか・・・・・・最終選抜試験を乗り越えた諸君には教えてしまった。隊律違反だろうしいずれバレるだろうが、今ここでわざわざ言う必要はないだろう。

常中の呼吸は強力だし、剣技と相性も良いのでわざわざ秘匿する必要性は薄いと思うが・・・・・・きっとそこは深謀遠慮な考えがあるのだろう。

「今まで話したような理由で、君には『職業』の獲得のための訓練と、呪術の適性診断。それと鬼食いに尽力してほしい。柱が片手間で捕まえられるような鬼は藤襲山に入れずに君の所に持って行こう」

柱が片手間で捕まえられるような鬼を食っても、既存のアビリティが強化されるだけで新しいアビリティは手に入らないと思うが、それはそれで良しとしよう。

「ありがとうございます。期待に応えられるよう、誠心誠意努力致します」

「僕の期待だけではなく皆の期待にも応えられるようにね。それで、君が持ってきた小さな鬼樹のことだけど、これはしのぶに預けて研究してもらうことにする。あれについて説明してくれるかな？」

「はい、あれは藤襲山で突然襲ってきた動く巨木の子にあたるものです。動く巨木は元は鬼でこの霊樹と融合したと言い、襲撃が失敗に終

わると、老木と融合してもう寿命だから介錯してくれと言い出しました。その時に『職業』についての話を聞きました」
　蟲柱が口を開く。
「鬼も他の生物と合体し、違う生命体になれば寿命などの弱点が生まれる、ということですか・・・・・・どうやって合体させるかが問題ですが。それにしても、寿命で死にそうな癖して人を襲うなんて、やはり元が付こうが鬼は鬼ですね」
　何故かうれしそうだ。いつも感情の見えない笑顔なので確信はないが、さっきより気持ち口角が上がっているように見える。
「あと、その元鬼やそれとは関係ない魚や木を食べても能力を手に入れられました。藤襲山だけの現象かもしれませんが、鬼以外を食べても能力が手に入るようです。若木や小魚では手に入らなかったので、一定以上の強さや大きさが必要なようですが」
　この発言を聞いて蟲柱の表情が豹変した。焦り・・・・・・いや恐怖の表情に近い。
「御館様！こいつを今すぐ処刑すべきです！鬼以外を食べても強くなれるということは人も食べられる、それで強くなれるということ。人を食らう理由があるならそれはもう鬼同然で御座います！人型の鬼を食えるということは人食いの抵抗感も少ないと思われます。処刑が不可能なら監禁して一生小魚のみを食わせるべきだと提言致します」
　これはまずい、なんてものじゃない。自分から人食いも不可能ではないと言ってから柱らの髪などを食べても良いか聞こうと思ったが、いきなり人食い予備軍扱いされるとは。話が通じそうにない。咄嗟に逃げようとして立つが、我が師悲鳴嶼に首根っこを捕まれて全く動きがとれない。【巨大腕】と【巨大脚】、【怪力】を発動させても僅かしか動けない。
「御館様の裁定を黙って聞きなさい、玄弥」
　逃げるのは諦めて黙って座る。こんな所で死にたくはない。慈悲のある裁定が下るように祈ることにしよう。
「玄弥、鬼のような食人衝動はあるのかい？」

「いえ、ありませんが」
アビリティ【悪鬼の因子】や【飢餓暴走】を使用しなければの話だが。
「なら、人を食べる理由はあっても動機は無いね。処刑する必要もないし監禁する必要もない。彼には強くなって多くの鬼を倒してもらわなくてはならないんだ」
しのぶは諦めるように頭を垂れた。
「・・・・・・御館様の意志のままに」
助かった、助かった・・・・・・・!ほっとして息を吐く。
「鮫や熊のような強力な生物の肉も食べれば強くなるのかな。藤の紋の家に滞在してもらうから、そこで百人食べた鬼でも倒せるようになるまでひたすら鬼食い獣食いに尽力してもらう。肉のための金はもちろんこちらで用意する。無駄に高級肉なんて頼まないように」
「はい、ありがとうございます!」
「そしてしのぶ、行冥、忙しいところすまない。次の任務も頑張って欲しい」
「はっ!」
「はっ!」
その後、隠に背負われてリレー方式で藤の紋の家まで運ばれた。当然目隠し耳栓でだ。

《九日目》～《一七日目》

《九日目》

朝、藤の紋の家で目が覚める。今日から二週間程はここに籠もって只管強力な獣や魚の骨肉を食らえと命じられた。二週間か……炭治郎に日輪刀が届くのが丁度そのくらいだった筈だ。丁度いい。彼が初任務で出会う沼の鬼の能力は、彼が浅草で出会う無惨の攻略、出来なくてもその一部の能力取得のために是非欲しい。

可能性は低いが、無惨の体を食えば鬼を人間に戻す能力が手に入るかもしれない。無論最善は浅草で無惨を殺すことだが、おそらく不可能だろう。しかし、その肉の一片でも手に入れたい。無惨の血肉は俺の能力を爆発的に強化するだろうからだ。前世の話だが、上弦の壱であれほど強化されたんだ。無惨本人（本鬼？）の肉を喰えば強力な血鬼術が手に入るだろう。

閑話休題、今は鬼喰いではなく普通の獣肉の話だ。近くの山でマタギが狩ったものが、腐らないように保存処理をしてここに運ばれてくる。

そして今日の昼飯がそれだ。朝飯には間に合わないようなので普通の米と焼き魚を食べ、筋肉強化運動や柔軟をして昼まで待つ。

昼時、大量の塩漬けの鹿肉が届いた。肉は既に捌かれており、骨は付いていない。これを家の人と一緒に煮て食べる。家の人は遠慮していたが、折角の鹿肉を俺一人だけで食うのは勿体ない、遠慮せずに食べていいと言って一緒に食べることにした。

しかし幾ら食べても、食らっても一向に能力がラーニングできない。腹一杯飯を食えるという喜びはあれど、能力を手に入れなければこの食事の意味はない。これはどうしたものか。

うんうんと唸り思い悩むが、わからない。夕飯も昼飯と同じく大量に獣の肉を食らうが、やはりラーニングは出来ない。

夜になり、布団に入った瞬間に気が付いた。

これは鮮度が原因だ。思い出せば、今までラーニング元に出来た食物は、鬼の踊り食い（我ながら趣味の悪い表現だが、これ以上に的確

な表現を俺は知らない）と採った・捕ったばかりの魚や木だ。この塩漬け肉、いくら近くの山で狩ったとはいえ、おそらく死後一日以上は経っているだろう。鮮度が足りなかったのだ。

分かったら早速その旨手紙に認めて鬼殺隊本部に送る。鎹鴉が伝書鳩代わりだ。

そうだ、ついでに炭治郎にも手紙を送ろう。この状況では知り得ない情報について、たとえば俺が知っている一二鬼月の能力や場所、反復動作などの訓練法などを、鬼や柱から聞き出したということにして教える。他者に伝える時は情報元を誤魔化すこと、信頼できない人間には教えないように、とも書いておく。

信頼出来ない他者に重要な情報、特に未来のものを知らせない、というのは俺にとっても大切だ。例えば御館様、産屋敷輝哉。直接合ったときは彼の雰囲気に魅了されてしまった感があるが、最終選別の残酷な仕組みと言い、その情報の秘匿具合と言い、客観的に見れば完全に信頼できるとは言い難い。俺の味方をしてくれたので逆らうつもりは決してないし、今教えた十二鬼月の能力など、必要な分は知らせるが……

鎹鴉に持たせて炭治郎に送る。そういえばこいつに名前を付けるのを忘れていた。前世と同じ「榛（ハシバミ）」でいいだろうか。

《十日目》

鬼殺隊本部から連絡が届いた。どうやらマタギと共に山に上れとのこと。早速出発の支度をし、藤の家を出る。鬼殺の任務ではないので切り火は断ると言ったが、どうしてもというのでやってもらった。

鎹鴉の先導でマタギのところに案内してもらう。歩いて半日程でマタギの家についた。【悪鬼の尽きぬ体力】のお陰か、半日休まず歩き続けることが出来た。

マタギの家の玄関には藤の花が植えてあった。この家も鬼殺隊協力者の家なのだろうか。

「失礼します、山に同行するように言われた鬼殺隊隊士の不死川玄弥です、……あの？」

返事が無い。人がいないのだろうか、扉を叩く。

「あーもう、わかったよ……鬼殺隊ね……どんな用だ？」
若い女性が出てきた。女性のマタギとは珍しい。その口ぶりから察するに、どうやら事前の連絡が行ってなかったらしい。
「それが〝かくかくしかじか〟で、新鮮な肉を食べたいんですよ」
「ふ～ん、なるほどねぇ……その能力なら人間の肉でも強くなれるんじゃないか？専門職の人間とかなら特に。あたしとか食ってみるかい？」
初対面で急にそんなことを言い出してきた。
「いえ、絶対にそんなことはしません……鬼殺隊の本分にも真っ向から反します。お名前をお聞きしても？」
「冗談だよ。名前は八重だ。お前は不死川玄弥だっけ？」
「はい、そうです。八重さん、よろしくお願いします」
前の俺なら初対面の女性なんて顔真っ赤にして固まってたんだろうな……未来を限定的にだが知っている故か、だいぶ精神的な余裕が出ている。
そんなやり取りの後、彼女の家で準備をして、山を上る。
「待て、熊（イタズ）だ。銃（シロビレ）撃（はじ）くから耳塞いでろ」
専門用語だらけの指示だったがなんとなく理解できた。耳を塞いで彼女が銃を向けている方を見ると、遠くに熊が見える。点のようというほどではないがかなりの距離だ。ここから狙えるのか、流石は玄人だ。
ドンと轟音が鳴ると、熊がよろめき、しばらくふらついて倒れた。
「よし、新鮮じゃなきゃダメなんだったか。この場で調理できそうなところは……」
「あ、いえ。そのままで大丈夫です」
熊に近づき、小刀で皮膚を裂いてそのまま中の肉を食う。【養分吸収】も発動し、指を木の根のように変化させて養分を吸収する。
「あ～、喰って得た異能にはそういうのもあるのか。わかった。あたしは回りを警戒しておくよ」
「ふぁい、よほひふおへはいしはす（はい、よろしくお願いします）」
熊の肉、内蔵、毛皮を頬張る。骨を噛み砕いて嚥下する。各部位の

味がごちゃごちゃになっているが、獣臭さだけは共通している。ちゃんと臭み抜きをして食いたかったが、我が儘は言ってられない。
「……羨ましいねぇ」
彼女のボソリと呟いた声が耳に入った。
「熊、食べます？八重さんほど上手くはないですが俺も警戒は出来ますよ、調理出来る場所を探して……」
だが、彼女の言いたいことは違った。
「いや、羨ましいのは熊の方だ……この話はやめにしよう」
彼女の淀んだ眼と状況から察するに、被食願望がある、のだろうか。家族が鬼になったトラウマの一種としてこういったものもある、と前世の悲鳴嶼さんから聞いたことがある。俺も家族が鬼になった人間だが、こうはならなかった。マタギという、動物の命を食らう職業の影響もあるのかもしれない。
［能力名【熊の胆力】のラーニング完了］
今日の収穫はこの熊一匹だけだった
《十一日目》
同様に山に上って鹿を二匹狩った。一匹は鍋にして一緒に食べた。年上の女の人と食べる鍋は、美味い。
［能力名【山岳歩行の心得】のラーニング完了］
《十二日目～十五日目》
そんな感じで、六日間を過ごした。何事もなく六日間を終えたので、とりあえずラーニングした能力を載せておく。
［能力名【分厚い皮膚】のラーニング完了］
［能力名【硬い骨】のラーニング完了］
［能力名【野生の膂力】のラーニング完了］
［能力名【最適逃走】のラーニング完了］
ラーニングした能力の詳細についても語っておく。【人物鑑定】を八重さんに試したが、こんな表記が出てきた。
――――
人物名：遠山八重
職業：【狩人】水準七三／百　【狙撃手】水準四三／百

適性：【魔喰の戦士】【魔銃使い】他

――――

と出てきた。これが御館様や鬼樹が言っていた【職業】か。数値の最大値が百だとすれば、八重さんはかなりの狩人ということになる。

ただ、この鑑定能力は自分には使えなかった。正確には自分に使っても理解できない暗号のようなイメージしか帰ってこなかった。残念だ。

【霊樹の旧世界智】は、発動したらぼんやりと神がどうたらや加護がどうたら迷宮がどうたらという知識が芽生えてきた。少なくともこの能力によればだが「神仏やその加護は実在する」といった内容だ。天照大神や月読命のような特定の神話の神ではなく【陽光の神】や【月の神】と言った概念や現象を司る抽象的な神についての知識だった。神は信仰を集める基点として迷宮を作る、ともあったがそもそもその迷宮が具体的に何なのかはわからない。情報源としてあまりにも曖昧だ。正直言って今必要な情報は何も手に入らなかった。

【龍脈感知】は、発動すると地下深くに大きな力の流れがあることが理解できた。そしてその大まかな場所もだ。だがその力の正体が何なのかはわからない。水脈とかなら井戸を掘る時に便利そうだが……

【龍脈接続】は発動しても何も起きなかった。龍脈に直接接触しなければいけないのだろう。

そして【一代進化】、進化とは、取り返しのつかなさそうな能力名なので、最初は森の中の鼠で試してみた。すると、[対象の蓄積経験値が足りません]という言葉が脳裏に流れた。獣としての経験とはなんだ、捕食者から逃げ、獲物を狩ることだ。そう思った俺は、鋭鴉に目をつけた。

榛を山の中で熊に追わせ、鼠などの小動物を狩らせて喰う。それを八重さんが狩りをしている最中の榛に強要する。いや～、心が痛い。というのも嘘ではないが、進化という言葉の響きに少しわくわくしている部分もある。数日すると、能力を使う時に脳裏に流れるアナウンスが変化した。

［対象のレベルが規定値に到達しました。素質を無視し、一度だけ対象を強制的に【存在進化（ランクアップ）】させることが出来ます。【存在進化】させますか？《是》《否》］

一応榛には許可を取る。おそらく取り返しの付かない変化だ。進化というからには負の方向の変質ではないだろうが、鬼のようになる可能性も全くない訳ではない。

過酷な経験値稼ぎに恨み言を言われつつ許可を貰ったので《是》を選択するように強く念じる。すると、いつも元気に空を飛び回っていた彼が暖炉のそばで寝始めた。

……そして翌日。

《十六日目》

俺の鋭鴉は異様に大きくなっていた。翼を広げた大きさは今まではふつうの鴉と同程度だったのだが、今では【巨大腕】を全力で発動して腕を広げた長さと同程度はある。子供くらいなら掴んで飛べそうだ。見た目普通の鴉から、巨大なワシになったような感じだ。無論羽は濡羽色のままだが、若干艶が出ている。

榛の話によれば【鋭大鴉】になったようだ。知性も向上したようで、使う語彙も話す内にどんどん増えて行っている。連絡事項を繰り返し喚くだけの今までのポンコツぶりとは大違いだ。

今日は八重さんとのお別れの日だ。名残惜しいが、熊や鹿からはもう能力を得られそうにない。これ以上長居するのは本来の目的にも反する。

次は海に行き、鮫や鯱などの強力な海の生き物を食べる……つもりだったが、その前に数個ほど任務を挟む。鬼殺隊本部から、山狩りが一段落付いたら一旦任務に戻れ、との指令が来た。鬼は地上にいるのだし、海棲生物の能力はそこまで必要ないか、とも思い直し、任務に励むことにした。

ともかく八重さんに別れの挨拶をしなければ。

「今日まで色々とお世話になりました。本当にありがとうございます」

「ん、ああ。あたしも楽しかったよ。鴉もデカくなったし、いろんな異

能を見せて貰ったし、面白かった。感謝するのはこっちの方だ。機会があったらまたやろう」

別れてから帝都に向かう。任務の内容は、帝都の郊外にある民家に鬼婆が出るという噂があるから調査せよ、というものだ。帝都のどこかにある珠世さんの屋敷を探したいこともあり、丁度良い任務でもある。

歩きながら常用の能力を確認する。常に発動させているものは、【巨大腕】【巨大脚】【悪鬼の尽きぬ体力】【石の体】【熊の胆力】【分厚い皮膚】【硬い骨】だ。熊から得た新しい能力は名前そのままの能力で、肉体を強化する類のものだ。体力訓練の時は解除するものもあるが、奇襲を警戒して防御力や精神力を強化するものは普段から使っている。【巨大腕】と【巨大脚】は制御訓練も兼ねて常に発動している。今のところは身長六尺（約１８０ｃｍ）程に収まる程度の大きさを保っており、徐々に制御も上手くなってきている。

今のところ唯一試していない能力、【融合】は名前からは能力の内容が読み取れず、試すのに躊躇していた。

だが強くなるためには使える能力を増やしていかなければならない。まずは近くにあった俺の腰くらいの直径の岩と、１０尺くらいの大きさの杉を【融合】させてみる。

融合した結果、杉の表面、皮の部分が硬い岩の成分になっていた。剥がして食べても特に能力はラーニング出来ない。

もう一度同じような材料（今回は栗の木だ）で【融合】を試してみたら、全く別の物体になった。木の実が小石に変わっていたのだ。この小石は数十程食べれば能力をラーニングすることが出来た。

［能力名【石礫生成】のラーニング完了］

他にも色々試してわかったことを記すと

・直接接触させた形で【融合】能力を発動させれば融合する。

・融合の内容はお互いの特性が無規則に合わさる形になる。コントロール出来る気はしなくもないが、かなり難しそうだ。

・無生物同士の場合は単に混ざるだけ。

・生物と無生物なら、生命の維持が可能な形で生物の体の一部が無

生物に置き換わる、または無生物が体に生える。
生物と生物の場合はまだ試せていない。帝都に行って探せば鼠や蛇を売っている店もあるだろう。それで試そう。
色々と試しながら歩いていると、帝都郊外の例の民家に着いた。もう夕方で、日が沈む直前だ。いきなり突入するのもどうかと思うので、近所の人に噂について尋ねる。
通行者の老女が近所らしいので噂について聞いてみた。すると、
「ああ、あそこの家ねぇ。子がいるとわかった途端に夫が事故で死んで、大変な時に変な噂が立って可哀想だねぇ。少し前までは興味本位で多くの人が尋ねてきたんだよ。今はほとんど見ないがねぇ……え？昼間に外で見かけたかって？何度かあるけど……それがどうかしたのかい？」
ということらしい。どうやらその妊婦は鬼ではないようだ。人が鬼を匿っている場合も無い訳ではないので、警戒を解くべきではないが、これは噂が根も葉もないという線が濃厚か。
その妊婦が住む家を尋ねてみる。それなりに大きく、特に庭が広い家だ。亡くなった夫の稼ぎが良かったのだろうか。
「失礼します。鬼殺隊の不死川という者です」
「なんですか急に。きさつ……たい？」
出てきたのは少しやつれて疲れた顔をした、腹が膨れた女だった。精神的負担からだろうか、髪の根本部分が白髪になっている。
妊婦に追い打ちをかけるようで心が痛むが、これも鬼殺のためだと思い噂について言及する。
「この家の中に鬼が出るという噂がありまして……事実無根の噂かと思いますが、念のため家の中を拝見させて貰ってもよろしいでしょうか」
「またそんな噂を真に受けて……満足するまで見ていって下さい。鬼なんてどこにもいませんから」
そういって家の中に入れて貰った。押し入れや床下等、日の当たらないところを隅々までを覗くも、鬼やその痕跡は見あたらない。
「やはり根も葉もない噂のようですね。失礼しました」

「お疲れでしょうし、お茶でも飲んで下さい」
湯気のたつお茶を湯飲みに注がれ、出される。ここは好意に甘えて飲もう。
「ありがとうございます」
熱い茶だ。冷ましながら少しずつ飲むと、だんだんと眠くなってきた。長時間歩いた疲れが出たのだろうか。こんなところで寝てはいけないが、眠気に抗えない。
［能力名【睡眠薬分泌】のラーニング完了］
しくじった、と思った瞬間に意識が途絶えた。
ーーー
胸に走るチクリとした痛みで目が覚めた。目の前には、俺に馬乗りになって包丁を構えている妊婦がいた。もう夜になっているようで、暗くてよく見えないが、見えたら血走った目をしているだろう、そういった雰囲気だ。
「な、なんで包丁が刺さらないの、どんな身体してるの、きさつたいって！」
俺は縛られて、畳の上に転がされていた。そこまで丈夫な紐ではなかったのか、【怪力】と【野生の膂力】の重ね合わせでなんとか引きちぎれた。心臓を狙ったのだろうが、【分厚い皮膚】と【石の体】、【硬い骨】のおかげで胸部は掠り傷で済んでいる。鬼化無しの【治癒加速】でこの程度なら治癒できる。
「ひ、紐が……」
妊婦の馬乗りから逃れ、包丁を奪い取る。それを妊婦に向ける。
「どんな事情があるかは知らねぇが、拘束させてもらう」
そう言うと、妊婦は背中を向けて逃げ始めた。しかし相手は身重、すぐに捕まえられた。
俺を縛っていた紐で妊婦を縛りつつ、尋ねる。
「何故俺を襲った。どうして人を刺すような真似をした」
すると妊婦は震えつつ、自分の腹を庇うそぶりを見せた。
「答えろ！」
妊婦はおずおずと答える。

「この子が……お腹のこの子が人の血肉が欲しいって囁いているの……人間の血肉じゃなきゃダメだって……だから代わりに私が食べて栄養を……」
胎児だけ鬼になってるのか？そして血鬼術か何かで母親を操ってる？しかし、妊婦をこんな目に遭わせる鬼舞辻無惨、わかっちゃいたがイカれてやがる……
腹の鬼だけ殺すにはどうしたらいい？おそらく人喰いとはいえ母親は人間だ、出来るだけ殺したくない。だが俺には無理だ。今持っている能力やその他の技能だけでは腹の鬼だけを殺すことは出来ない。
今すべきことは、助けを呼ぶことだ。出来れば堕胎技術を持つ者を。
珠世さん……ダメだ、この世界ではまだ接触してない。
蟲柱……胡蝶しのぶなら可能か？そう思い、外で待機させていた榛に向けて叫ぶ。
「榛！今まで気絶していた！蟲柱を呼んでくれ、胎児が鬼だと伝えろ！」
「リョーカイ、蟲柱なら帝都にイル！数十分で来レル！」
柱という言葉を聞いた途端、妊婦がびくりと震えた。いや、俺の目が正しければその腹が震えた、のか？
「柱……！そう、柱は嫌よね……どうすればいいの？……わかったわ」
自分の膨れた腹に向けて語りかけ、その後、ぶるぶると腹部が震え、徐々に大きくなっていく。このままいけば腹が破裂してしまいそうだ。
「止めろ！死にたいの……いや鬼の胎児！親を殺したくはないだろう！膨れるのをやめろ！」
しかし腹が膨れるのは止まらない。膨れた腹を球としてみると、その直径が妊婦の身長を越えた。なんたる人体の神秘だ、いやそれにしても異常だ、鬼が母胎の身体を柔らかくしているのだろうか。その直後、服と皮膚に切れ目が入り、その中から血塗れの子鬼が出てきた。
子鬼の外見は、頭だけ岩ほどの大きさの赤ん坊のような生理的嫌悪感を催す見た目で、しかしその母親は愛情を感じているようだ。

「ああ……私の赤ちゃん……初めまして、ね……」
「そんなこと言ってる場合か！止血、どうにかして止血……！」
止血をしなければと頭が一杯になっている俺に子鬼が襲いかかる。とは言っても体格の差は圧倒的だ。脚にかみついてきた子鬼を俺の足の肉ごと引き剥がし、そのまま【怪力】と【野生の膂力】の合わせ技による力業で遠くに投げ飛ばす。足の肉が食いちぎられて痛いが、【治癒加速】頼りで放置する。今はとにかく元妊婦、鬼の母親の止血だ。
「私の赤ちゃん……ど・・・・・・こ……」
出血と痛みで気絶した母親の邪魔な上着を脱がし、夕方の家捜しで見つけた裁縫箱で縫ってみるが、不慣れなのと暗くて傷口がよく見えないのもあって、中々出血は収まらない。
手を動かしながらどうすればいいか悩んでいると、ふと思い出した。炭治郎の顔に木の枝をくっつけて悪戯した場面をだ。あれ、止血にも使えるんじゃなかろうか。
そう思いつくと、家の床から木の板を引っ剥がし、【根幹操作】で腹の形に合うように曲げて、母親の腹に沿わせて【肉木融合】を発動させる。
手で触った感じでは止血が出来たようだ。傷口は完全に木材と融合している。
「ふぅ……」
余裕が出来たので、蝋燭を探して明かりを付けよう……と思ったところで子鬼が再度現れた。いや、もう子鬼ではない。生まれたばかりの時は異様な頭の大きさとそれに付着するような小さい首から下の乳児の体。だが、頭の大きさはそのままに体がその頭に合うように変化していた。一言で表すと、巨大な大人の鬼になっていた。
体長は３０尺（９ｍ）程。ただ肘をついて這っているので、高さは５釈（１．５ｍ）程だ。
庭で子鬼が徐々に大きくなっていたのには気配でなんとなく気づいていた。だが母親の止血を優先したのと、蟲柱が来れば鬼が強くなっても一瞬で終わるだろうという自信もある。いくら生まれる前

に人間を食べていようと、生まれたばかりの十二鬼月でもない鬼だ。彼女なら簡単に倒せるだろう。
俺の技量では首を切るのは難しいが、彼女が来るまで時間稼ぎさえすればいい。
「柱が来るまで遊んでやるよ」
「柱は嫌だ、柱は嫌だぁ……！お前を倒して早く逃げる……！」
「逃がすかよ！」
巨大な腕での薙ぎや叩き潰しを躱し、【巨大腕】と【巨大脚】の出力を全開にする。これで俺の身長も十尺（３ｍ）程になり、相手との体格の差異が小さくなった。それでも三倍はあるが。
巨鬼が暴れたことで家が壊れつつある。母親が下敷きになるとまずいので抱えて外に出る。
庭に出た俺は、俺と同程度の大きさの木を引っこ抜き【肉木融合】を発動させて手からつながる自分の一部とし、それを【根幹操作】と【枝葉操作】で形を整え、振り回しやすくする。
相手は巨体だ、これを武器にしよう。
「……在舍衛國　祇樹給孤獨園……」
念仏を唱えて感覚を全開にしつつ、膂力強化系能力も全開にして巨鬼に木を叩きつける。巨鬼は抵抗するが、何度も何度も叩きつけていると少しずつ怯むようになってきた。
「ぐぎゃ、助けて、おかあちゃん、助けてぇ」
母親はあの出血量で、まだ意識が不明瞭な筈だ。助けに来ることはないだろう。
怯んだ隙に【根幹操作】で木の幹を曲げ、巨鬼の腹に巻き付ける。そして枝葉から【養分吸収】の根を出す。この能力は指を吸収器官にしていた。枝から根を出すことも当然出来る。
そして全力で鬼の力の源である血を啜りにかかる。鬼の養分が木を通して俺に渡ってくる。
［能力名【接触念話】のラーニング完了］
［能力名【巨体化】のラーニング完了］
［能力名【寄生】のラーニング完了］

同時に、ついさっき取得したばかりの【睡眠薬分泌】で根の先から睡眠薬を分泌する。鬼に効くかどうかわからないが、できることはやった方がいい。

「ち、血が吸われてる……お前の仕業か！」

木から血液が吸われていることに巨鬼が気が付き、より一層激しく暴れ回る。なんとか木の束縛を維持しようとしたが、千切られてしまった。

束縛から解放された巨鬼は、母親の元に向かう。おそらく母親を喰う気だ。生まれて間もないということは、直接人喰いをしたことはない筈だが、母親に人を喰わせてたことは確かだ。母親を喰うことにも躊躇はないだろう。

殺人・食人犯とはいえ人間だし、せっかく助けた命だ。奪われることは避けたい。食人により鬼が回復することもだ。

巨鬼の足を掴み、全身の筋力を使って足止めをする。掴むというより、指をめり込ませるという動作に近い。めり込ませた指に【養分吸収】と【肉体操作権奪取】を発動して、体力を削りつつ行動を阻害する。

「待てコラ！逃げずに戦え腰抜け！」

自尊心が高いようには見えないし効かないだろうが、つい挑発が口から出た。母親から搾取しつつ都合の良い時だけ助けを求める、父親と同類だがある種正反対の態度に苛立つ。

操作権を奪えた相手の右腕で地面を掴み、歩みを少しでも遅らせる。

しかし相手の巨大な身体がもたらす力は凄まじい。数十秒もたたずに巨鬼は庭の隅に横たわっている母親の元にたどり着く。

「母ちゃん、母ちゃん、あのお方も酷ぇことする。母ちゃんだけ人間だなんて。早く逃げて母ちゃんも鬼にしてもらおうなぁ。鬼になれば治るからなぁ」

予想と違い、巨鬼は母親を喰う気は無いようだった。一瞬気が緩んで、手を離してしまった。母親も鬼にするなどとふざけたことを口走っていたのに。

巨鬼は母親を両手で抱え、四つん這いから立ち上がって走って逃げ始める。
その時、大きな陰が月明かりを遮った。
「あら、鬼は胎児だと聞いたのですけれど……生まれたてでもうこんなに大きくなったのですか？」
蟲柱、胡蝶しのぶだ。思ったより少し……いやかなり早かったな。助かった。
「そして鬼喰いの隊士……あなたですか、妙に大きな鋏鴉を使って通報してきたのは。私はこの通り体が軽いので、掴まって飛んで来れました。まあ、少々目立ちはしましたが」
蟲柱は榛の足に刀の鞘を掴ませてそれに懸垂をして（ハンググライダーのように）飛んでいた。榛は鞘を足から離し、蟲柱は地面に降り立つ。
「何だぁ、増援かぁ？母ちゃんを《鬼にする》助ける―邪魔をするなぁ！」
「助ける？母親は小康状態のようですし、病院に連れて行くなら私がしますよ？あなたは……まあ鬼殺隊の本分から言えば殺さなければならないんですが、条件を飲めば見逃してあげましょう」
「じょ、条件？知るかぁ！母ちゃんを俺と同じ、強い鬼にしてやるんだぁ！」
巨鬼は蟲柱を蹴飛ばし、道を開けようとする。しかし当然の事ながら柱がその程度の攻撃を食らう筈は無い。するりとすり抜けるように躱した蟲柱は、そのまま日輪刀を抜き技を繰り出す。
［胡蝶しのぶは戦技【蝶ノ舞：戯れ】を繰り出した］
ひらひらと鱗粉を散らして舞う揚羽蝶が幻視される技だ。その技により巨鬼の身体には大量の藤の花の毒が打ち込まれた。
「な、なんだぁ？チクっとしたがこれが攻げ……ぐが、足が、足が溶ける、溶けちまうう！」
毒を打ち込まれた巨鬼の足から溶解し始めた。これが藤の花の効能、恐ろしくも頼もしい。
鬼にしか効かないとはいっても俺は鬼喰いをしている、藤の花は口

にしない方がいいだろう。
「巨体なので蝶ノ舞一度だけでは足りなかったようですね……おっと」
蟲柱は巨鬼の手からこぼれ落ちた母親を拾う。俺は彼女に駆け寄り、母親を護ろうと巨鬼との間に立ちふさがった。
「うごぉおぉおお！母ちゃんをぉ、がえぜぇ、ぜぇ、ぜぇ」
ゆっくりと、しかし目に見える速度で足を再生させつつ、巨鬼は真正面にいる俺を無視してその先の母親を抱える蟲に突進する。
巨大質量の衝突、それを最初に食らうのは俺だ。避けることは出来ない。後ろには蟲柱と巨鬼の母親がいる。蟲柱は避けられるだろうが母親の方は無理だろう。
「胡蝶さん！デカくなります！」
つい先ほど手に入れたアビリティ、【巨体化】を使う。【巨大腕】【巨大足】とも合わさって、俺の体長は一六尺半（５ｍ）ほどにまで大きくなった。靴や服の四肢の部分はすでに千切れて邪魔になったので脱ぎすてていたが、これで服の大きさが完全に合わなくなり全裸になるしかなかった。夜で人通りも無いのが幸いだ。
体に力が漲る、が、それ以上に体が重い。【巨大腕】【巨大脚】だけの時には無かった症状だ。体が大きくなる分動きが鈍重になるようだ。
だが、体長が大きくなるということは筋肉量も多くなるということだ。各種膂力強化系アビリティもそれに乗算され、巨鬼の衝突に耐えられるほどの膂力を得た。
巨鬼の体長は三十尺、常人の六倍程だ。誰かから聞いたことがあるが、長さが縦横高さ六倍になれば、重さは六掛ける六掛ける六倍となるらしい。計算は出来ないが、凄まじい質量の衝突だ。
その衝突に、相手の腹を抱きしめて耐える。俺の膂力もまた速度や人間性を犠牲にして凄まじいものとなっていた。
感覚を全開にして筋肉に十割の力を発揮させる。一歩も引かず、蟲柱と鬼の母親に体が触れることなく、耐えきった。
「なるほど、これほどまでとは・・・・・・鬼食いの力は凄いですね。

私たち鬼狩りも鬼の力を利用するステージに来たのかもしれません」
柱故の余裕だろうか、戦闘中に俺を研究者の目線で観察している。柱には余裕があっても俺に余裕はない。突進の衝突の直後で疲労している巨鬼を押さえ込むので精一杯だ。
「今！トドメを刺して下さい！」
「では、トドメは実験も兼ねましょうか」
滑り込むような脚捌きで巨大化した俺の股を掻い潜りーーー全裸なので恥ずかしいとか言っている場合じゃないーーー巨鬼の脚に日輪刀を突き刺す。
そのまま巨鬼の足下を擦り抜け、巨鬼の背後を取った。
「がぁ、母あちゃん・・・・・・邪魔だぁ、どけぇええ！」
脚を突き刺されたことに巨鬼は気づかず、母親に向けて猛進を開始する。
「ぐぅっ・・・・・・行かせるか!!」
三十尺と十六尺（９ｍと５ｍ）、巨人同士のせめぎ合いであり、膂力は互角。
取っ組み合いつつ頭突く、蹴る、脚を払う。相手は堅い体でそれを耐え、同じように反撃してくる。
「こ、胡蝶さん！援護、援護お願いします！」
「ああ、そろそろ『孵化する』頃なので離れた方がいいですよ」
「え？孵化？」
ふと視線を声の方に向けると、潰れた家屋の屋根に鬼の母親を横たえて立っていた。
視線を向けた隙に、巨鬼は俺を突き放し蟲柱の方に向かって駆け出していた。
マズい。俺の失態だ。咄嗟に【石礫生成】を使って生成した石（とは言っても巨大化した俺のサイズに合わさったのか、漬け物石程度の大きさはある）を投げつける。頭に当たるが怯まず鬼は蟲柱の方に向かった。
蟲柱はそれでも逃げない。手を柄に掛けてはいるものの、抜刀すらしていない。

「う～ん、もうそろそろだと思うのですけれど・・・・・・」
そう、蟲柱が呟いた時だ。蟲柱にあと一歩で手が届きそうだった巨鬼が突然倒れ込んだ。
「ガハッ、カヒュ、ブロォオオエッ！」
倒れ込んだ巨鬼は突然嘔吐した。
「うん、成功・・・・・・ですね！」
成功・・・・・・？何の話だ？蟲柱は鬼を病にでも掛けたのか？
よく見ると、吐瀉物は鬼の体内に戻ろうとして蠢いている。
それも当然、吐瀉物はただのゲロではなく、血と胃液にまみれた蛆の大群だったのだ。
「蟲の呼吸　蛆ノ舞　寄食叢生とでも呼びましょうか。正確には型ではないのですけれど」
「胡蝶さん、これは・・・・・・？」
「ああ、もう元の大きさに戻っても大丈夫ですよ、鬼食いの隊士さん。これは私があなたの持ってきた鬼樹に影響を受けて作り出したものです」
と蟲柱は蛆の大群を指さす。言われた通り小さくなったが服が無いことに気づく。榛を呼び、代わりの服を持ってきてくれと頼んだ。
蟲柱はこっちに視線を向けずに語り続ける。
「鬼は他の物と融合すれば鬼ではなくなる・・・・・・ならば鬼を素材にして、鬼ではない鬼殺の道具を作ることが出来るのでは？という発想です。ここ数日で実験してみまして、試作品として完成したのがこの『鬼食い蛆』です。簡単に言えば鬼の血だけを啜らせて作った寄生蠅の卵ですね。鬼のような再生能力は無く、日光の弱点も無く、ただ一つだけ、通常の寄生蠅と違う特徴は、鬼の血肉を食らって爆発的に増殖することです。単為生殖ですらなく、分裂に近いですね」
俺も鬼の力を使ってはいるが、鬼の力とは本来危険なものだ。大丈夫なのだろうか。
「危険性・・・・・・とかはあるんですか」
「もちろんありますよ。生態系への危険、人間への危険、変異の危険・・・・・・数え上げれば切りがありません。だから鬼食い蛆の母

体を環境にばらまいて鬼を駆除しよう、なんて真似も出来ません。慎重に卵を保存・管理して、一匹一匹卵を打ち込んで、増殖した蛆は一匹残らず焼却処分する。焼却が出来ない森の中や水の中、人家の中では使えない・・・・・・正直言って、あまり使えない類の試作品ですね」

話している内に、巨鬼の体が蛆に完全に食い尽くされていた。蛆と血だまりだけが残っている。蛆は鬼にとって危険な生物らしいので鬼食いをしている俺は近づかない方がいいだろう。

隠の人たちが焼却用の油と俺の服を持ってきてくれたのでさっさと服を着て、鬼の母親は隠の人の一部が応急処置をし、蟲柱と隠の人たちの大勢が残った蛆の焼却作業に取りかかる。俺は鬼の母親の方で応急処置の手伝い等をやる。特に【肉木融合】の解除は俺しか出来ない。

止血に使った木は本来異物であるので、外して糸でちゃんと腹の裂け目を縫合する。内蔵部分は何故か傷ついていなかったようだ。

「分裂した蛆も体の外に出ると衰弱して殆ど死んでしまうみたいですね。万が一焼却から逃れた蛆がいても安心ではあります。ところで、この鬼について詳しく聞きたいのですが・・・・・元は胎児ということでしたよね？」

作業をしつつ蟲柱は俺に説明を求める。

「ええ、胎児で人を食えないから母親に指示を出して人を食わせてたみたいです」

「母親の方が人を？血鬼術で操られていたのでしょうか？そうだとしてもーーーッ!?」

突然蟲柱の話が途絶えたので振り向くと、蛆の群と油だまりがあって、蟲柱がいた。何も変なことはーーー

「血だまりが、突然地面に吸い込まれて消えました！血鬼術の予兆！警戒！」

これ以上何が起こるというのだろうか。腰の、仮の日輪刀を抜いて隠たちと円陣を組み、傷の縫合途中の鬼の母親を護る。蟲柱は蛆の処理を中止し、地面を避けるように塀の屋根を駆けてこちらに向かって

いる。
どこから来る、どこから・・・・・・あの母親に固執している巨鬼なら・・・・・・母親を直接狙う？
振り向き、鬼の母親を見る。縫合が終わりかけていた母親の側に血だまりが湧き出ている。縫合している隠は未だにそれに気づいていない。
「母親を連れて逃げろぉ！」
隠はこちらを振り向き、そして周りを見渡して血だまりに気付く。だがもう遅い。
血だまりは母親の傷口の中に入り込み、一瞬にして腹を膨らませる。
「蟲の呼吸、蜂牙ノッ!?」
蟲柱は鬼の母親の腹を突き刺そうとするが、それは母親の股ぐらから飛び出してきた乳児が蟲柱の日輪刀を手と額の角で角度を反らした。
。額に角の生えていること以外は普通の人間と変わらない、鬼の乳児だ。
「おぉおおおぎゃあああ!!!」
乳児はドスの効いた低い産声を上げつつ、蟲柱の刀にしがみつきそれを全身の力でへし折ろうとする。
「させるか！」
俺は仮の日輪刀で乳児の腕を切り飛ばし、掴んで全力で人のいない方向の塀に投げつける。投げ飛ばす途中で右手の中指を食いちぎられた。かなり痛い、今の再生力では部位欠損は治るだろうか。
「玄弥隊士！助かりました！戦闘続行可能ですか！」
「唾付けときゃ治りますよ！」
強がりはするが投擲はもう出来なさそうだ。刀も強くは握れない。
「しかし、確実に蛆で食い尽くした筈、一体何故・・・・・・」
「柱の女。たしかに俺、いや俺の兄貴にして親父は蛆で殺されたぜ」
ドスの効いた声、鬼の乳児は俺たちに一歩一歩近づきつつ蟲柱にそう言い放った。

「俺の前世である兄貴の血鬼術は、死後発動型だ。知ってるか？記憶ってのは血に残るんだぜ？血統、そして血液になぁ！血液に精子の性質を持たせ、お袋の卵子に受精させ急速成長させる！血統と血液の記憶を血鬼術で増幅させた俺の記憶は完全に兄貴の記憶と同一だ。説明終了、殺すぞ！」

鬼の乳児は弾丸のように跳躍し、蟲柱に向けて飛んでくる。【巨大腕】を最大出力にして腕を文字通り延ばし、乳児の弾丸跳躍を防ぐ。

今度は左手の手のひらを食いちぎられた。だが俺も構わず巨大な掌で鬼の乳児を握り締め、乳児の脚を食い千切って嚥下し、地面に叩きつけた。

［能力名【再生加速】のラーニング完了］

［能力名【肉体圧縮】のラーニング完了］

［能力名【帯血記憶】のラーニング完了］

「何が殺すぞだぁ？もう一遍言って見ろ！いくら力が強くたって口が回ったってなぁ、質量不足じゃ意味ねーんだよ！前世の方が万倍強かった！」

さらに【巨大脚】を発動させて踏みつけ、抑えておいて日輪刀を柄から引き抜こうとする。だが、その瞬間俺の視界が回転した。

「あ゛？俺の前世が、何だって？」

投げ飛ばされたのだと一瞬気付かなかった。あの大きさで俺を投げ飛ばせる訳が無いと慢心していたのだ。だが違った。鬼の大きさに惑わされてはならない。

受け身を取って立ち上がり、鬼の乳児を見ると両腕が異様に大きくなっていた。片腕で三尺と少し（１ｍ）程のそれは即座に小さくなる。

「おぉまぁえぇの真ぁ似ぇ」

そうだ。俺のアビリティである【巨大脚】と【巨大腕】、それをこいつは模倣し即座に活用したのだ。

鬼の乳児は弾丸跳躍しようと脚を曲げーーーその一瞬の隙を背後の蟲柱に狙われた。

［胡蝶しのぶは戦技【蜂牙ノ舞：真靡き】を繰り出した］

蟲柱はその刃で鬼の胎児に毒を注入した。

「クソッ、まだだぁ！」
鬼の乳児は腕を巨大化させて振り回すが、ひらりひらりと蟲柱は躱す。やがて鬼の体は毒に溶かされ、血だまりの他に残すものは無くなった。
「ふぅ、少し焦りましたが、これでおしまいですね」
いや、違う。復活は一度だけではない。今世のあいつからも【帯血記憶】というアビリティがラーニング出来てしまっている。それの意味するところは・・・・・・
血だまりが再度蠢き出す。鬼の母親に向かって飛び込む。蟲柱は咄嗟に気付き、血液に刀を突き刺す。だが液体は切れない、そのまま血液は鬼の母親の胎内に入り、再度腹が膨れ上がる。
「何度も何度も・・・・・・女の胎を何だと思っているのでしょうか」
女の股ぐらから胎児が出て来た。今度はそのまま急速に成長し、少女の姿となった。少女の鬼は当然全裸であり、短髪で牙が鋭い以外は普通の少女の姿だ。
鬼の少女は母親を抱え、庭の外に駆け出そうとする。
「逃しません」
蟲柱はその瞬足で鬼の前に立ちふさがる。俺も遅れて鬼の後ろに立ちふさがる。
「・・・・・前前世の長男は母親に恩がある。十月十日もの間育ててくれた。同族食いという悍ましい真似までして育ててくれた」
「？何を言っているのですか？母親はあなたが血鬼術で操っていたのでは？」
「私にそんな力はない。自らの意志で彼女は禁忌を犯した。息子のために犯してくれた」
確かに、俺を包丁で突き刺した時の鬼の母親は、鬼に操られている感じは無かった。だから何だ。鬼の母親は人間で、護るべき対象だ。罪は後で償えば良い。
「だから私は母を助ける。命を懸けてあなたを助ける。命捨ててもこの恩に報いる。だから・・・・・・降伏だ」
え？これ今から再戦が始まる流れじゃなかったか？太陽が上るま

でここで粘るしかないと思っていたんだが。
「柱には敵わない。母を助けてくれ。すべて前前世の私のためにやったことだ」
「こちらにも一つ条件があります。あなたのお母さん、今まで何人、人を食いましたか？」
「・・・・・・十四人と言ったところか」
「そうですかーーーじゃあ、その人数分の拷問をして、耐えられたら助けてあげましょう！」
　蟲柱ーーー胡蝶しのぶがそう言う。胡蝶さんの悪癖、『拷問に耐えたら助ける』だ。それが人間に対しても出るとは・・・・・・・
「まあ、十四人分の拷問なんてとても鬼ではない体には耐えられないでしょうけど・・・・・・人を食ったんだから、仕方ないですよね？」
「ちょ、ちょっと待って下さい胡蝶さん！人間を拷問するって、本気で言ってるんですか？隊律違反ってレベルじゃ・・・・・・」
「いいですか、玄弥隊士。人間を食べる、という存在は、人間とは言わないんですよ。血鬼術で操られていたのでしたら情緒酌量の余地もあったのですけどね。あなたも肝に銘じておいて下さい」
　蟲柱の張り付いたような笑みにぞっとする。こういう人だったか？いや、こういう人だったのだろう。ただ、俺たち人間に対する態度と鬼に対する態度が違うだけで・・・・・・特に禰豆子と出会う前の蟲柱だ。何も不思議はない。
「それと・・・・・・胎盤を通じて人の肉の栄養を摂取した、あなたも拷問の必要がありそうですね」
「どうやら話は通じなさそうだ。母から聞いた、キサツタイは鬼を狩ることに執着する異常者の集まりだと。鬼を狩ることに犠牲も禁忌も厭わない狂気の集団だと」
「あなた方鬼側からしたらそうでしょう。そうでなければ鬼殺隊ではなくお助け隊を名乗っています。あ、ここ、笑うところですよ？」
　笑えねぇ・・・・・・なんとかして胡蝶さんを止めないと。ただ子供を育てただけ、とは言い難いが、同じ鬼舞辻無惨の被害者なのだから。

頭を回せ。どうにかして胡蝶さんを止める方法を考え出さなければ。
「胡蝶さん、俺は拷問には反対です。鬼ではなく人をどうこうするのは鬼殺隊の領分を外れています。人が人を食ったんだから、警察に引き渡すのはどうでしょう」
「鬼殺隊の中にも正気があったか、柱だけが狂っているのか。二人だけではわからない」
鬼の少女が口を挟む。
「お前はだぁってろ！」
これで、どうだ？胡蝶さんを止められるか？
「そうですね、仮に母親を人と見なせば筋が通った理屈です。ですが、人食いですし、人間とはもはや言えない、といった見方もあります。その場合は鬼殺隊の領分ですね」
やはり、だめか・・・・・・
「ですので、柱合裁判で決めることにしましょう！玄弥隊士ももちろん、証人として来て下さいね」
「助かった、のか？私は。我が母は」
前から思ったが、鬼の少女は奇妙な口調だ。生まれたばかりなのに、どこでこんな口癖がついたのだろう。

「ああ、鬼のあなたは死んで・・・・・・いや、拷問して耐えられたら良いことにしましょう。この不死川玄弥隊士に生きたまま食われること。被害者一人一時間、合計十四時間耐えられたら、私の実験体として生き延びる権利を与えます」
え・・・・・？俺が拷問する役なのか？確かに鬼の踊り食いは得意だが、無抵抗の、生まれたばかりの、さらには女、と来た。これを食うのは相当ハードルが高いぞ？というかこれだけ並べたらとんだ畜生じゃねぇか！
「いや、無抵抗の相手を食べるのは流石に・・・・・・日輪刀を彼女に渡すので、それで自死してもらうってのはどうでしょう」

「食べなさい」
「いやだから・・・・・・」
「食べなさい。鬼喰いが鬼殺隊の戦力増強になるなら、食べない選択肢はないですよね？」
「いや俺が特例なだけで元々隊律違反・・・・・・」
「食べなさい」
「はい」
　ということで、鬼の少女を再生させつつ食べることになった。母親は隠の人たちが応急処置をしてから産屋敷邸に連れて行った。
《十七日目》
　家屋が潰れてそろそろ警察が来そうなので、蟲柱は近くの藤の家紋の家に俺と鬼の少女を連れてきた。ここで鬼喰いを行わせるようだ。抵抗した時のために蟲柱も来た。
「鬼喰いの準備はいいですか？では、ここから十四時間、休憩を除いてきっちり計りますので、捕食を開始して下さい」
　蟲柱は夜の十二時になった時計を見つめつつ、そう俺に命じた。
　それから十四時間は鬼の少女にとっては当然、俺にとっても苦行だった。
　日輪刀で鬼の体を捌く。この時鬼の頸を切らないようにする。
　捌いたら一口大に千切ってから口に入れる。マズいので出来るだけ咀嚼しないようにする。食べ終わったら鬼の再生を待ち、その後再度捌く。再生力が下がったら俺の血肉を少しだけ食べさせる。【治癒加速】と【再生加速】ですぐに治るため、これは蟲柱も許した。
　最初は鬼の少女も激痛で呻いていたが、途中から激痛を堪えつつ少しだけなら会話出来るようになった。
「名前は、何と言うんだ？」
「母は、基螺と名付けてくれた・・・・・・・ぐっ！」
「母親は、どんな人だったんだ・・・・・・？」
「優しかった、少なくとも私に対してはそう話しかけてくれた・・・・・あぎっ！」
　その間、休憩もせずにずっと蟲柱は冷たい目で俺たちのことを見て

いた。俺たちは一時間ごとに休憩を入れていたが、胡蝶しのぶは黙って俺たちを監視していた。何を思っていたのだろうか。

結果だけを記す。柱合裁判は明日だ。俺と基螺は捕食の拷問が終わった後にぶっ倒れて気絶した。

［能力名【鉄の体】のラーニング完了］

［能力名【死後に残る念：母胎回帰】のラーニング完了］

［能力名【記憶する遺伝子】のラーニング完了］

［能力名【血の受胎告知】のラーニング完了］

［能力名【胎内成長】のラーニング完了］

［不死川玄弥は職業【魔喰の戦士】を獲得した！］

《十八日目》

《十八日目》

今日はちゅうごうさいばんの日、楽しみだなぁ。

・・・・・・現実逃避をしても仕方がない。俺は隠に背負ってもらって産屋敷邸まで行く。基螺もついて行くと行っていたが、無惨に産屋敷邸の場所がバレる可能性があるということらしいので、藤の家紋の家に置いておく。

産屋敷邸に着いた時には、俺の師（正確には今世ではまだ正式な弟子ではない）、岩柱・悲鳴嶼行冥と恋柱・甘露寺蜜璃、そして蟲柱・胡蝶しのぶの三名が来ていた。

「南無阿弥陀仏・・・・・・玄弥よ、柱でもないのにまた産屋敷邸に着ているとは。何かやらかした訳ではあるまい」

「あなたが不死川さんの弟さん？初めまして、私は甘露寺蜜璃、恋柱をやらせてもらっているわ。その髪型、凄く素敵ね、私も真似しようかしら？」

「甘露寺さん、それは流石に冗談・・・・・・ですよね？」

「冗談よ、しのぶちゃん！」

恋柱と岩柱に話しかけられる。特に恋柱は中々濃い。肌の露出も含め、前世でも今世でも少し苦手な人だ。そして俺の髪型を真似した甘露寺さんを想像してしまい、笑うのを堪える。

「っ・・・・・・、悲鳴嶼さん、俺は真面目に鬼殺を遂行してましたが、ちょっと特殊な事情がありまして。そして初めまして・・・・・・甘露寺さん」

「ふふ、初めましてではないみたいな反応ね。普通の人は私の髪色を見て驚くのに・・・・・・可愛い！」

初めましてではないといわれて少しギクリ、とする。前世で俺はこの人と既に会っているからだ。しかし彼女は別世界線の人間であり俺のことも当然覚えていない筈だ。しかし、普通の人は髪の色よりもその露出度に驚くのではないだろうか・・・・・・まあ言及もしにくいのだろう。

そんなこんなで自己紹介やら事情の説明やらで時間を喰っていると、他の柱もやって来た。
炎柱、煉獄杏寿郎。生きている煉獄さんに会うのはこれが初めてだろうか。煉獄さんについては、炭治郎から間接的にしか聞いていないが、素晴らしい人物ということだけが炭治郎からは伝わってきた。
水柱、富岡義勇。炭治郎を鬼殺隊に連れてきた張本人であり、禰豆子の為に腹を切るとまで言った男だ。
霞柱、時透無一郎。無限城で俺と一緒に戦った少年だ。時透さんは無限城で上弦の壱に殺され死んだ。何度も言うが彼とこの少年は同一人物だが別人でもある。だがそれでも命を懸けて共闘した相手ともう一度会えたのは嬉しい。嬉しさを、流す涙をバレないように堪える。
そして蛇柱、音柱、ここらへんは正直ぴんと来ない。前世でも生死が不明な人物だ。陰湿と派手という印象だ。
最後は俺の兄貴、風柱、不死川実弥だ・・・・・・・が、待っていても一行に来ない。
「あれ?不死川さん、どうしたのかしら・・・・・・もしかして弟さんに恥ずかしくて会えないとか?」
恋柱が言う。いや、あの兄貴はそんなタマじゃな・・・・・・・
「あ、見えたわよ、不死川さん!おーい!」
振り返ると、そこには走ってこちらに来ている兄貴がいた。何故か抜刀している。近くに鬼はいない筈だが、修羅の表情で全速力でこちらに・・・・・・いや、俺に近づいてくる。
[不死川実弥は戦技【初烈風斬り】を繰り出した]
あ、これマズい奴だ。と思った瞬間には俺はすれ違いざまに足首を切断されていた。
「あ、ッグアァ」
【治癒加速】と【再生加速】の重ね掛けで咄嗟の止血は出来た、が鬼化していないのでまだ再生は出来ない。
「兄貴ィ、何をォ・・・・・・・」
「俺に弟なんていねェんだよォ。聞いたぞ、鬼喰いをやったってなァ。

鬼喰いなんて俺の家族にも鬼殺隊にもいねェし要らねェ。今カタワにしたんだからさっさと鬼殺隊引退して隠居でもしてろォ！」
「兄貴、俺は鬼を倒そうとして必死で・・・・・・」
と思って言ったが言葉に詰まる。確かに一度死んで転生した今、自分や他者の命への執着が薄くなっている気がする。二度目があるなら三度目もあるだろう、と思っている訳ではないが、一度目の人生よりも必死さが足りていないのは確かだ。
「必死で、何だ、あァ!?」
「いきなり兄弟喧嘩とは、派手派手だな！だが・・・・・・お館様の前だ、地味に平伏してろ」
俺は音柱に、兄貴は岩柱に鎮圧された。兄貴は大した抵抗もせずに黙って組み伏せられたようだ。俺の足を斬って目的は果たしたということか。
「玄弥、足が・・・・・・すぐに縫合を！」
岩柱は俺の身を案じ、隠に呼びかける。
「だ、大丈夫です、多分・・・・・・宇髄さん、少し離して下さい」
「おゥ」
首は掴まれたままだが力を緩められた。俺は斬られた足を拾い、傷口に強く押しつける。【治癒加速】と【再生加速】を出力最大にし、なんとか足首を繋げることが出来た。傷は少し残るが、それもいずれ消えるだろう。
兄貴がその光景を目を見開いて凝視する。
「お前ェ、それってもう殆ど鬼じゃねェかァ。これ以上鬼喰いするなら・・・・・・マジで殺すぞォ」
「やめるんだ、実弥」
その時、屋敷の奥から制止の声がした。産屋敷耀哉、お館様だ。
「鬼喰いに関しては私が許可を出している。鬼喰いが隊律違反なのは、鬼の血肉を耐性を持たない人間が摂取することへの危惧が理由だ。だから、耐性を持っていると思われる君の弟に特例として鬼喰いの許可を出すことは吝かではない。今までにも鬼喰いの隊士は鬼殺隊の歴史上何人かいたことだしね」

「しかし、お館様・・・・・・」
「他の柱からは賛同を得ているよ。実弥、どうか納得してくれないかい？」
　炎柱と水柱が口を挟む。
「うむ！お館様の仰る通りだ！鬼を喰って鬼を殺せるなら正に一石二鳥！確かに鬼の血肉を体内に入れるというのは理解し難いが、より多くの人の命を助けられるというのなら、是非も無い！」
「・・・・・・俺も賛成だ」
「煉獄ッ・・・・・・分かりました。お館様の仰る通り、殺しはしません。ですが、玄弥隊士の除籍処分についてはこれからも嘆願させて頂きます」
　助かった・・・・・・せっかく生まれ変わった命を今度は兄貴に奪われちゃたまらない。俺が真っ当なままならそんなことはしないと信じているが、俺が鬼喰いで鬼も同然になったと判断したら頸を斬りに来るという信頼もしている。
「うん、玄弥隊士の件については一段落ついたようだね。で、今日の本題はそれではないんだ。『鬼ではなく人が人を喰ったらどうするか』今までは机上の空論として放置してきたけれど、この度でそうではなくなった。鴉に聞いているとは思う、この斉藤捻子が人を殺して喰った。鬼が関わっているとはいえ一四の人間をだ。この女性をどう処分するかについて話し合ってもらいたいと思っている」
　というと、隠が縛られた鬼の母親を背負って持ってくる。
　その後は侃々諤々の議論だった。主に炎柱、岩柱が警察に引き渡すべきと主張し、音柱、蛇柱が鬼殺隊内で処分すべきだと主張した。蟲柱は意外にも中立の立場というか司会や論点整理を担当していた。兄貴は俺のことについて考えているのか押し黙り、恋柱と水柱は口を挟む隙間が無さそうだった。霞柱は普段の通りボーっとしていた。ちなみに俺は裁判の証人としての発言はしたが柱ではないので議論に入ることは出来なかった。
　議論の詳細は省くが、結果として『鬼舞辻の情報を可能な限り抜き取る（人間のため呪いが掛かっていない）』と『鬼殺隊のことについて

警察に証言しないと約束させ、その約束が信頼出来る（今回は基螺という人質がいるため信頼出来る）』という二つの条件を満たす者のみ警察に引き渡すことになった。引き渡し論者の部分的勝利と言っていいだろう。良かった。

その後鬼舞辻の情報を斉藤から抜く、という作業に移ったのだが、基螺が人質にいるので躊躇せずほいほい喋ってくれた。

まず鬼舞辻無惨は老人の男として現れ、亡くなった夫の父親を名乗ったということ。当時夫を亡くして未亡人の妊婦状態だった斉藤は無惨を家に招き入れ、そこで腹に血液を注入されて胎児のみ鬼にされたということだ。胎児は人間の血肉を栄養として与えなければ腹を食いちぎって外に出る、とだけ言い残し姿を消したらしい。

無惨からしたら日光を克服する鬼を作る為の実験のようなものだったのだろう。妊婦は多くいるだろうになぜ彼女を選んだのかと言うと、恐らく郊外に住んでいることと、彼女の夫が特殊な職業をしていたからだ。（【職業】ではない）

『解術屋』、語弊を恐れずに言うと、〝異能〟ーーー鬼で言う血鬼術、人間で言う呪術や陰陽術などだーーーを持つ人間の犯罪者や悪人に苦しめられている人々を助ける職業らしい。その血を引く息子（今や鬼の娘だが）を鬼化すれば何か特殊な鬼が作れるかもしれないと無惨は思ったのだろう。

事実、基螺は特殊な鬼だ。死後発動し、復活する血鬼術など俺は知らない。正確には復活ではなく記憶を持った同一個体の生成のため、死を克服した訳ではないが、それでも・・・・・・だ。

人間の異能使いなど鬼殺隊である俺たちには関係ないということで、柱や上位の隊士でもないと人間の異能については知らされていない。無駄に下位の隊士が鬼狩りに役に立たない力を身につけても暴走するだけだ、とのことだ。

前々から思っていたが、鬼殺隊には秘密主義の気がある。お館様の声に蕩かされて忘れかけたが、解術屋のことを聞いて思い出した。昔からの方針らしいが、転生して客観的な視点を少しは身につけられた俺からすると、もう少し情報公開をしても良いのではないかと思う。

情報公開をすると無惨のスパイとか入り込んでくるのだろうか。お館様ならそれも見抜けそうな気もするが。
　そう進言すると柱全員から、新人隊士如きが何を・・・・・・という目線で見られた。だが、お館様はこう答えた。
「うん。その通りだよ、玄弥。だから、上位の隊士や柱にはこれから魔術・・・・・・西洋魔術を学んでもらおうと思っている」
「「!!!!」」
　柱も、そして隠も、当然俺も全員驚く。柱については人間の異能についても知ってはいたのだろうが、それでも自分がそれを体得出来るとなると驚きが勝る。俺はそもそも前世では無かった技術の登場になんと言ったら良いか、困惑している。
「僭越ながら・・・・・・お館様、鬼に呪術の類は効果が薄いとのことでは？」
　岩柱が代表して質問する。
「うん、呪術〝は〟ね。呪術とはそもそも〝生命の支配〟に属性として偏っている異能だ。言霊で他者を直接操る。木を支配して間接的に敵を攻撃するなど・・・・・・だけれども、無惨は呪術の玄人だ。見たことがあるだろう？無惨の名前を口にして細胞を破壊され、死んでいった鬼を。あれは血鬼術じゃない。純粋な〝呪い〟、技術だ。無惨は呪術で今まで生んだすべての鬼を支配している。普段は操作を放棄しているが、条件で自動的に呪術を発動出来るようにしているようだね。既に支配された者を支配することは難しい。およそ千年研鑽を積んだと思われる呪術の怪物に、我々が今から追いつけるとも思えない」
「でしたら・・・・・・陰陽術とか・・・・・・伝奇小説で読むし・・・・・・」
　霞柱がぽつりと呟く。それにお館様が返す。
「体系的な陰陽術は平安の時代に最盛期を迎え、鬼殺隊でも今の呼吸法のような立場にあったようだね。だが陰陽術は学問だったんだよ。無惨に書を焼かれ、本拠地を焼かれてその殆どが失伝してしまった。最近は神祇省で復古の動きがあったんだけれど、無惨が裏から手を回したんだろう、神祇省そのものが廃止されてしまった。単純に学問と

しての継承がなされていないんだよ」
「お館様の意見もごもっともだが！そういう邪な技術に現を抜かしてしまうと、剣術の研鑽が疎かになるのではないかとの懸念があり！やはり鬼の頸を斬って殺すのには剣術が肝要ではないかと考える！」
　炎柱だ。炎柱は異能の体得に反対の様子。
「・・・・・・」「火薬の何が邪だって？派手でいいだろうが、あ？」
　蟲柱が微妙な表情をし、音柱が文句を言う。
「君たちは特別だろう！やはり一般の隊士にとっては肉体と剣技の鍛錬こそ最優先の課題だ！」
「あのー・・・・・・さっきから話を聞いてて疑問に思ったんですけど、西洋魔術って、一体誰から学ぶんですか？もしかして、お館様？そうだとしたら私、嬉しいです！」
　恋柱が手を挙げて質問する。
「私は簡単な呪術しか扱えないからね。教えるのは別の人にしてもらうことにしたんだ。あまね」
「はい」
　お館様の妻である産屋敷あまねさんが部屋から退出し、しばらくしてある髭の生えた外国人を連れて出て来た。
　何か分からない言葉を喋っている、外国語だろうか。あまねさんが通訳を務めるようだ。
『私はグレゴリー・E・ラスプーチン。ロシアから亡命してこの国に来た。今は産屋敷家に客人として世話になっている』
「彼はラスプーチン。ロシアで怪僧と呼ばれている有名な祈祷師だ。前からロシア皇室に繋がる人脈の一人として知り合ってはいたんだけれど、暗殺されるかもと連絡があってね。日本に亡命してもらっているんだ。やっと魔術講師の伝手が出来たんだ、これを利用しない機会はない」
「か、怪僧・・・・・・」
　驚く恋柱、少し引いているようだ。
「では、西洋魔術を披露してもらおうか。ラスプーチン、頼む」
『ああ。これは少し高等な術式だが、魔術の神秘を体感してもらうた

めには良いかもしれない。深淵系統第三階梯魔術・・・・・・【不可視の亡霊】』

その瞬間、ラスプーチンの姿が、まるで元からその場にいなかったかのように掻き消えた。

「え・・・・・・嘘・・・・・・・」「これは・・・・・・・」「あーなるほどな、クソ親父がやってた奴か」「特に変わった様子は無いが・・・・・？」

前者二人は恋柱と蟲柱、後者二人は音柱と岩柱だ。音柱は忍の家系、忍にもこういった技術があるということだろうか。岩柱は反響定位で周囲の状況を把握しているため、視覚的な作用が効かないのだろう。岩柱は何が起こったのか隠に尋ねている。

数十秒して再度姿を表したラスプーチンは言った。

『これで、魔術の神秘が理解出来たかね？』

「うむ！似たような血鬼術の鬼と対峙したことはあるが、これを人間が使うのは鬼殺の効率上昇に繋がるだろう！しかしその程度の術であれば、やはり剣術や呼吸の鍛錬に時間を費やした方が良いと思われるが、いかがだろうか！」

炎柱が反論する。あまねさんが通訳し、ラスプーチンにそれを伝えた。

『魔術の神秘を理解しないとは・・・・・・ならばこれはどうだ。炎熱系統第一階梯、【炎禍】』

ラスプーチンは庭に降り、庭の池に向けて渦を巻く球状の炎を放つ。球は人間の頭部大だ。

炎球は池の水に直撃し、爆発。蒸発と爆発の勢いにより池の水位を大きく減らした。飛び散った池の水は俺たちにも降りかかる。

庭を破壊したことで柱の雰囲気が剣呑になる。特に兄貴は、宙に彷徨っていた視線を、その衝撃によって唐突に現実に引き戻した。俺が鬼染みた回復力を示した事件についての思考からようやく我に返ったようだ。

「いきなりお館様の庭を穢しやがって・・・・・・何モンだァ、テメェ？」

「あの方はラスプーチン氏と言って・・・・・・話、聞いてました？かくかくしかじかで・・・・・・」
　どうやら話を聞いていなかった兄貴と、それについて説明する蟲柱。その間に、ラスプーチンと柱たちの雰囲気はどんどん危険なものになっていく。
「ああ、お魚さん達が、可哀想」「直すのに・・・・・時間がかかりそうだね・・・・・・」「なんと・・・・・・愚かな・・・・・・」「グチャグチャと魔術の神秘だのなんだのほざきやがって鬱陶しい。庭だけならともかく、池に鯉が棲んでいるのが見えなかったのか？ぶつぶつ・・・・・・」
　最後は蛇柱だ。生き物の大切さには一家言あるらしい。
『これで魔術の威力について理解したかね？』
「ああ、派手に理解させられたぜ、お前が恩人の庭先をグチャグチャにして顔色一つ変えない奴だってことがな。お館様！こいつを雇うくらいなら俺の親父を雇ってください！俺は異能の才はからきしだったが、クソ親父ならこいつ程じゃねぇが似たような術は使えたし教えられた！」
「しかし、天元。君は殺人集団が鬼殺隊に入るのは鬼殺の本分に反すると以前・・・・・・」
「こんな得体の知れない奴を師として仰ぐくらいならどんな屑でも身内の方がマシです！もちろん、修行と称した虐待は音柱の名に掛けて行わせません」
『何・・・・・？我が秘儀を極東の島国の人間如きが真似できると・・・・・？ああこれは通訳しないでくれ』
　あまねさんも不快感を隠せない目線でラスプーチンの方を見る。通訳にも心なしか悪意があるようだ。
「では、こうしようか。まずラスプーチン、彼は祈祷師として有名でね、むしろそちらの方が本分だと言っても良い。医学の知識もある。教師ではなく、蝶屋敷で蟲柱の部下として働いてもらおう。しのぶ、良いかい？」
「御意」

『な・・・・・・人の下に付くとは私は聞いていないぞ・・・・・・・産屋敷！どういうことだ！』
「ラスプーチン。君は何か勘違いをしているようだけれどね。彼ら柱は、君のような政治的嗅覚や特殊な異能は持っていないけれど、人型の生命体の頸を斬る、という一点に関して言えば、世界でも有数の人間の九人だ。皆、私の誇らしい子供達だよ。そうだね・・・・・・たとえば彼、炎柱・煉獄杏寿郎に関して言えば、彼の奥義は、君達の尺度で言えば〝第五〟に相当する。君の上司として相応しいだろう？」
『だ、第五だと・・・・・・？そんな馬鹿な、迷宮にも潜ったこともない人間が・・・・・・だから通訳するなと言っているだろうが！』
　あまねの迫真の通訳に、柱からの失笑が漏れる。ラスプーチンは恥辱で顔を赤くした。白人なのでより一層顔の赤みが目立つ。
「それと、音柱の父親も教師として雇用する。異能を含む忍者の技能については、炎柱の意見も取り入れ、隠のみに教育することとする。危険な修行などは、これを行わせない。二人とも、いいね？」
「「御意（！）」」
「ではラスプーチン。もう下がって良いよ。では柱合裁判は終了、解散だ。皆、忙しいところすまなかった」
『ムゥ・・・・・・わかった』
　ラスプーチンが屋敷の奥に下がる。
　待て俺。柱が集合していて、俺がその場所にいるのは今この時だけだ。このままでいいのか？俺はこの大切な機会を逃してもいいのか？産屋敷耀哉が信頼出来ないとか、未来の情報を漏らすのは危険だとか、そういう俺の小賢しい考えでこの機会を逃しても良いのか？
　駄目だろう。今はここに柱と一部の隠そしてお館様一家しかいないから情報の秘匿は問題無い。お館様はあの残酷な最終選抜を主宰しているから信頼出来ないとは言ったが、それは人道面の配慮の話であって鬼殺に関しては信用出来る。ここでぶっちゃけるしかないだろう。
「待ってください！」
「だから地味に平伏してろって言ったろう、鬼喰いの隊士。お前に発

言は許可されてねぇ」
「俺は・・・・・・未来から来ました！」
「は？兄貴に嫌われてついに頭がおかしくなったか？それとも鬼の喰い過ぎか？」
「待ちなさい、天元・・・・・・これを聞き逃すと不味いという予感が強くする。玄弥、言ってみなさい。他の柱も皆聞きなさい」
　お館様に発言を許可されたので、前世での鬼が関わる主な事件について時系列順に列挙していく。呼吸の痣については省く。柱の皆の寿命を減らしてほしくないからだ。
「浅草で無惨が炭治郎に・・・・・その後珠世という特殊な鬼が・・・・・」
「那田蜘蛛山で下弦の伍が・・・・・・」
「無限列車で下弦の壱が・・・・・その後上弦の参に煉獄さんが・・・・・」
「吉原で上弦の陸が・・・・・・」
「刀鍛冶の宿で上弦の肆と伍が・・・・・・」
「無限城で俺は上弦の壱と交戦し・・・・・・」
「その後過去に戻り、前世と今世では少し世界の仕組みが違うようで・・・・・・」
　そんな感じで語った。質問攻めも多くあったため、一時間程話は掛かった。
「なるほど！乗客全員を上弦の参から守りきり、死亡！鬼殺を完遂出来なかったことを除けば、我ながら天晴れだ！」
「上弦の陸ってのは頸を同時に斬らなきゃ殺せねぇのか。なら対策すれば人死にも少なくなるかも知れねぇ」
「呼吸を使う鬼・・・・・・南無阿弥陀仏。上弦の壱は昔の鬼だから無理だが・・・・・・獪岳は拘束すべきだろう」
「珠世とかいう鬼の頸は後回しでいいだろォ」
「そして、この中でもっとも重要な情報は、浅草に現れる鬼舞辻無惨について・・・・・・そうですね？お館様」
　全員がお館様の方を向く。お館様は少しの間目を瞑り、そして見開いた。
「そうだね、しのぶ。・・・・・・浅草で、無惨を攻撃する」

柱はそれを聞き、各々表情を浮かべた。それに共通しているのは、押さえ切れぬ歓喜と憎悪だ。
「無惨が浅草に現れるのは八日後。それまで無惨には少しも異変を悟られてはならない。柱の皆は通常の任務を遂行して欲しい。竈門炭治郎には前日まで伝えず、通常の任務として浅草に来てもらう。浅草の雑踏ということで、民間人への被害が出るのは避けられないが、なるべく減らすように努力しよう・・・・・・そして、おそらく今回の作戦では無惨を殺すことは出来ない」
柱の表情が困惑に変わる。炎柱がその困惑を代表するように口を開いた。
「僭越ながらお館様！どのような鬼であろうとも、柱九人が集まって斬れない鬼の頸などないでしょう！」
「そうだとも、杏寿郎・・・・・・だが、おそらく無惨は頸を斬っても殺せない。再生力もどの鬼よりも高いだろう。無惨を殺せるのは日の光のみではないだろうか。鬼殺隊の文献を漁らせてみたが、戦国期にそのような記述が僅かにあった。・・・・・・今回では鬼殺隊の脅威を知らしめ、活動させにくくするために、そして将来殺すための布石として、無惨に攻撃を行う。だから、今回の攻撃で誰も死んではならないよ」
「「御意」」
柱全員、納得した顔で頭を垂れた。
「では、詳しい話は明日にしようか。ああ、玄弥は基螺を連れて炭治郎と鱗滝左近次の所に行ってくれ。左近次は暗示の玄人だ。人を喰わないように基螺に暗示を掛けてもらうと良い」
そうしてお館様は、長時間話して病気の体に堪えたのか、屋敷の奥に姿を消した。柱も解散した。兄貴は、俺に一言も声を掛けずに隠に連れられて屋敷を出て行った。

《十九日目》～《二十六日目》

《十九日目》

基螺を連れて、鱗滝左近次の所に向かう。炭治郎が持つものと形は同じ杉の箱を、基螺のために藤の紋の家の人が作ってくれていたが、基螺曰く「息が詰まること土中の如し、狭きこと牢屋の如し」と言ってどうしても入りたくないと主張されたため、日中は基螺を宿で休ませつつ(鋏大鴉の榛に監視させている)、俺はその近くで鍛錬とアビリティの実験。夜間に進むことになった。

それにしても基螺の頸は本当に斬らなくてもいいのだろうか。蟲柱は拷問を通じて許してもらったし、おそらく鬼を赦す裁量を蟲柱は与えられているからこそのあの言動だと思うのだが、他の柱は赦すだろうか・・・・・・

そんなことを考えつつ、藤の紋の家の近くで売っていたカブトムシとクワガタムシを【融合】で一つにする。カブトムシの角が尻に生えたクワガタ虫になった。喰っても特に何も得られなかった。

次は近くの山で捕まえた蛇と鼠を【融合】で一つにする。だが不可能だった。

[対象の系統差が術者の力量を越えています]

系統差、ということは、蛇同士でなら可能なのだろうか、と思い試したら上手くいった。二股の頭を持つ蛇。放置してみると、お互いを威嚇しあい、最終的には片方の頭が片方を食いちぎって殺した。それで死ぬようなこともなく死んだ方の頭を引きずって這って山の中に消えていった。

最後は猫二匹。これは町でペットとして売っていたものだ。これも不可能だった。

[対象の高等性が術者の力量を越えています]

今度は高等性が原因で不可能だったようだ。それにしても、術者の力量次第では人間同士でも融合させられるのだろうか。我が事ながら末恐ろしい能力だ。

《二十日目》
夜は【悪鬼の尽きぬ体力】任せで基螺と一緒に全力で走る。
日が上る前に次の宿に着き、泥のように眠る。
正午過ぎに起きて鍛錬、疲れたらアビリティの実験を行う。
今日試したのは【接触念話】と【帯血記憶】だ。
【接触念話】の方は簡単。相手に触れると相手と念ずるだけで会話が出来る、という効果だ。自分の思考を伝えるだけではなく、副次的な効果として、相手の思考をーーーほんの表層だけだがーーー読み取ることが出来る、ということがある。この念話で嘘を吐いたり事実を隠したりするのは、訓練すればやれなくはないだろうがかなり難しそうだ。お相手は基螺でした。
【帯血記憶】とは、自身の血液に自分の記憶を込め、相手に摂取させることで記憶を読み取らせることが出来る、というものだ。アビリティの熟練度によって記憶の密度は変わるようで、今の熟練度であれば湯飲み一杯程の血液に数日分の記憶を宿らせることが出来るようだ。同じく実験の相手は基螺。
《二十一日目》
ようやく狭霧山についた。鱗滝左近次と炭治郎には前日に事情を記した手紙が送られていたようで、だいぶ歓迎してくれた。
鱗滝さんは注連縄と紙四手を持って山の奥の儀式場めいた場所に基螺を連れて行き、暗示を掛けてくれた。これを一週間程やらなければならないようで、しばらく基螺を鱗滝さんのところに預け、その後は蟲柱の所に戻って新しい毒のための被験体をやるようだ。死ぬような毒は投与しない、と蟲柱は約束してくれたし、基螺も母親の身柄が鬼殺隊次第ということなら仕方がない、と納得した。基螺は少々殊勝過ぎじゃないだろうか。記憶を継いでいるとはいえ、少女態の基螺は何をしてもらったという訳でもない筈だ。親というだけでそこまで尽くすのは理解出来ない。
炭治郎と稽古をする。木刀での仕合だ。呼吸を使われても膂力や体力は俺の方が上だが、水の呼吸独特の受け流す技術が半端じゃない。それに型を使われると瞬間的な威力で上回られてしまう。勝率

は二割と言った所だ。俺はアビリティは身体強化系のものしか使っていないから他のものも使えばどうなるかわからないが。

《二十二日目》

他のまだ実験していないアビリティの一部ーーー巨人態の基螺から手に入れた【寄生】、そして少女態の基螺から手に入れた【死後に残る念・母胎回帰】【記憶する遺伝子】【血の受胎告知】【胎内成長】等は倫理的な問題があり試せない。【鉄の体】は単に【石の体】の上位互換。体表に金属光沢が出来るということもなかった。おそらくこの鉄というのは単に硬度を表しているのだろう。【肉体圧縮】、これは試していてかなり面白かった。発動すると体長が数分の一になり、しかし体の硬度や膂力、敏捷性は数倍までに跳ね上がっていた。一部だけ圧縮することも出来るようで、制御に手間取ったものの、【巨大腕】と【巨大脚】との併用で、通常の大きさだがその強度は通常の十数倍という四肢になることが出来た。これを制御に手間取らずに戦闘時でも動かせるようになればかなり無惨戦に役に立つだろう。

《二十三日目》

ようやく刀が届いた。炭治郎と俺の日輪刀だ。炭治郎のそれは抜刀すると黒く染まったが、俺のは色が変わらなかった。・・・・・・まあいい、分かっていたことだ。貰ってそのまま喰うのを忘れていた猩々緋鉱石も喰っておく。

［能力名【陽光吸収】のラーニング完了］

日の光に当たると体がポカポカして少し元気になる程度の能力だった。体によく分からない力が満ちている気もする。【光合成】と併用すると短時間でかなり疲れが取れた。【光合成】は体表が緑になるため常用出来ないが、【陽光吸収】は常用しておこう。

鬼殺隊から借りていた中古の日輪刀は、本来は返さなければいけないのだが、これも喰っておく。バレたら俺の日輪刀を返上すれば良いだろう。

［能力名【適性診断】のラーニング完了］

このアビリティは対象の適性や将来性が分かるというもので、【人物鑑定】の下位互換かと思いきや、そうではなかった。【人物鑑定】の

対象は人間に限定されているが、【適性診断】は人間だけではなく鬼や獣、さらには無機物の適性も分かる。
たとえば禰豆子は鬼なので【人物鑑定】は出来ないが、【適性診断】を通して見ると
［適性：蹴り（特大）日光克服（大）血鬼術（中）等］
という適性を見る事が出来た。前世の最盛期禰豆子と大きく変わらない。
《二十四日目》
炭治郎の鋏鴉が北西の町に向かえと叫ぶので、俺も同行することにした。榛は狭霧山にいる基螺の監視に当てて、俺と炭治郎、禰豆子の三人で行くことにする。
道中、禰豆子には呼吸法を教えないのか、という話題になった。鱗滝さん曰く、呼吸の力で暗示が解ける可能性があるから、決して教えるな、だそうだ。
「でも俺は禰豆子が暗示に掛かってるのが嫌なんだ。鬼だから仕方ないのは分かるけれど、禰豆子は暗示が掛かっていない状態でも俺を守ってくれた。禰豆子は鬼になっても自分の考えで人々を守れる筈だ。今禰豆子が言葉を喋れなかったりあまりはっきりと物を考えられないのは暗示のせいだと言うし、いずれ暗示が不要だってことを鬼殺隊に示さなきゃいけない」
それには俺も同意する。
だが、暗示が原因で言葉を喋れなくなったり物を考えられなくなる、だと?それは初めて聞いた。禰豆子が普段ムーとしか言わないのは竹を加えていたからだと思っていたが、暗示が原因なのか・・・・・・では基螺もそうなるのか?
長いつき合いではないが、基螺がそうなるのを想像してゾッとした。だがその一方で納得する自分もいた。
基螺は禰豆子とは違う。彼女は、母親を唆して人を喰わせたという記憶を持っている。本人ではなく前前世の話であることを考えてみても暗示するのは仕方がないとも思える。
「ああ、そうだな・・・・・・基螺も暗示を掛ければそうなるのか。あ

いつは仕方ない部分もあるが・・・・・・」
「人喰いの母親から生まれたんだって話は聞いたけれど、親と子供は似ていても違う。彼女もいずれ暗示を解く許可を貰えたら良いと思う」
などと話している内に、北西の町に着いた。
炭治郎はこの町で初めて異能の鬼に出会ったらしい。三人に分裂して地中に潜る血鬼術を使う鬼だと聞いた。
「なぁ、炭治郎・・・・・・あれ？」
俺が前を歩いていたせいか、気がつくと炭治郎は、やつれて顔に殴られた跡のある男の人と一緒に離れた所にいた。
鬼の詳細について伝えないと、と思い炭治郎の所に駆けようとするが、ふとお館様に言われたことを思い出す。
無惨に異変を悟られてはならない。ここにも鬼がいる。もし血鬼術を事前に知っていることが相手の鬼にバレて、そいつが無惨に情報を持ち帰ったらマズい。
知らないフリをしておこう。俺は炭治郎に別行動をするとだけ告げ、情報収集をする。だが炭治郎のように鼻が利く訳でも善逸のように耳が良い訳でもない俺は情報収集がはかどらず、そのまま夜を迎えた。
町の中をうろうろしていると、炭治郎の大声が聞こえた。
「玄弥！鬼だ！鬼が現れた！こっちだ！」
途中の塀などを飛び越え、走って声の場所に駆けつけると、似たような姿をした三体の鬼が炭治郎と女性を抱えた先ほどの男の人を囲んでいた。
「三体！禰豆子とお前と俺！一人一体で対処するぞ！」
俺はそう叫び、一番近くにいた二本角の鬼に殴りかかる。
鬼は俺の拳を地中に潜って回避し、背後から現れて俺の足首を掴む。
地中に引きずり込まれそうになるが、咄嗟に日輪刀を抜刀して相手の手を切り捨てようとする。は俺が抜刀している間に手を離し、退避していった。

「抜刀にも時間がかかる愚図がァ！俺たちの邪魔をするなァァ！」
鬼は背を丸め、力を溜めてから解放するような仕草を取った。それと同時に地面の闇が大きく広がり、俺の足下を完全に覆った。
咄嗟に跳んで回避しようとするも、闇の広がる速度は俺の回避速度を大きく上回り、結局俺は闇の沼の中に取り込まれてしまう。
俺が飲み込まれた闇の沼の中には、被害者の遺物だろう着物が数種類浮かんでおり、そして二本角の鬼もその中にいた。
「窒息してさっさと死ねェ！愚図がァ！」
・・・・・・確かに、ここは空気が薄い。だが、試しに【エラ呼吸】を発動してみると、かなり楽になった。水というか泥の中と似たような空間なのだろうか。
「な、なんだ、その首のエラは！お前本当に人間か！」
「手前ェ、鯨って知ってるか？船くらいデケぇ生き物なんだが、なんでそんなにデカくなったか分かるか？分かんねぇよなァ！」
「何の話だァ!!お前、なぜ脱いでいる！この美食の空間、闇の沼を汚すなァァァ！」
服をてきぱきと脱ぐ。途中で鬼が泳いで突撃してきたが腕で弾く。
「硬ァ!?」
【石の体】【鉄の体】【分厚い皮膚】【硬い骨】【巨大腕】【肉体圧縮】・・・・・・防御に関わる常時発動させているアビリティだ。この数のアビリティで容易に鬼の爪は弾けた。
「水の中じゃ浮力のお陰でデカい体を支える為の力が要らねぇからだよ！全部の力を攻撃に使える！【肉体圧縮】解除ォ！」
脱ぎ終わって、ふんどし一丁になった俺は機会を見計らって【肉体圧縮】を解除する。その直後、俺は十七尺（約５ｍちょい）程にまで巨大化する。
そう、俺は常時【巨体化】【巨大腕】【巨大脚】を使用した上で【肉体圧縮】を使用していた。その結果、高密度な肉体を持つが体長は六尺程という状態になっていた。甘露寺さんの肉体に近いだろうか。最初は肉体が爆発しそうになるほど制御に手間取ったが、徐々に出力を上げる事でなんとか実現出来た。

そしてその状態から【肉体圧縮】を解除すれば、予備動作無しで瞬時に巨大化出来る。服が千切れるのは困るのでこうして事前に服を脱がなければならないのが短所ではあるだろうか。

鬼が近づいてきた瞬間に巨大化した俺は、小さな畳ほどの大きさの掌で鬼の首を掴み、そのまま頭を二口程で噛みちぎった。

「・・・・・・・!!!!」

頭を喰われたため声無き声しか出せない鬼の胴体も、西瓜を丸飲み出来るような口で噛み砕き、咀嚼し、嚥下していく。

［能力名【三位一体（トリニティ）】のラーニング完了］

［能力名【闇沼ノ異界】のラーニング完了］

［能力名【高速遊泳】のラーニング完了］

喰い終わったら、視界を求めて何とか地上に脱する。

巨体のまま外に首だけ出すと、禰豆子は一本角の鬼から女性を抱えた男の人を守っていた。だが禰豆子も一本角もどちらも鬼であり、格闘戦では決め手に欠けた戦闘になっていた。

そして炭治郎は見あたらない。おそらく三本角の鬼に闇沼に連れ去られたのだろう。

あの程度の鬼一体だけなら沼の中でもおそらく炭治郎は大丈夫だろう。問題はこっちだ。双方が決め手に欠ける戦いでどちらが不利かというと、当然守る相手のいる禰豆子が不利だ。こちらに加勢すべきだろう。

ついさっきラーニングした【闇沼ノ異界】を発動し、地中に再度潜って泳いで近づく。沼の拡張速度は鬼が使っていたものよりも遅く、少し時間は掛かったが、一本角の鬼の真下に到達出来た。

今度は沼の奥深くまで潜る。かなり深い沼の底まで到達した所で、【高速遊泳】を全力で使って巨体のまま地上に突進する。【高速遊泳】は全力で使うとかなり速度が出たが同時に体力も消耗するようだ。

禰豆子から一本角が少し距離を取った瞬間を狙い、二本角の足裏に向けて張り手をぶちかます。一本角は空中一〇尺（３ｍ程）まで吹き飛ばされた。

巨体のまま上半身だけを沼から出し、親指と人差し指で日輪刀を摘

まみ、落下してくる一本角の頸に向けて狙いを定める。
だがその日輪刀は禰豆子の蹴りによって吹き飛ばされた。
「ムー！」
禰豆子の様子を見るに、どうやら新手の鬼と勘違いされているようだ。巨体故に強く握っていた訳ではなかったため日輪刀は弾かれてしまった。
「禰豆子！俺だ、玄弥だよ！」
「ム？」
【肉体圧縮】を発動し、徐々に俺の肉体を元の大きさに戻していく。
【肉体圧縮】は解除は一瞬だが発動には少し時間が掛かるのだ。
「ムム、ムムムムムム・・・・・・・ム？」
混乱した表情で禰豆子は、地面に落下した後闇沼に潜って距離を取った一本角の鬼と俺を交互に見比べる。どちらも闇沼に潜っている。俺は全裸のため、腰から下を闇の沼から出す訳にはいかない。いざという時までは。
そして俺の日輪刀は・・・・・・・一本角の鬼の側に落ちていた。それを一本角の鬼は拾う。
俺の呼吸の適性の無さ故に、何色にも染まっていなかったその日輪刀は、どす黒く濁った蒼色に染まっていた。
「ハハハハハハ、なんだこれは！面白い玩具だなぁ！色が変化して行きやがる！」
その瞬間、俺の中で何かがキレた。
あそこまで追い求めた日輪刀、刀鍛冶の里の人が俺の為に作り上げてくれた日輪刀を・・・・・・！
「返せやゴルルァァァ!!」
全力で【高速遊泳】を発動し、一本角を追いかける。だが鬼はそれ以上の練度の速度で泳いで逃げる。
一本角が逃げ、俺が追いかける、だが追いつけない。
俺の体力が【悪鬼の尽きぬ体力】込みでも限界に達したころ、かなり遠くまで来てしまった。山の麓か？鬼は余裕の表情で五十尺（１５ｍ）程の高木の枝の上に座っている。

「これを持てば呼吸？とやらが使えるのか？そういえばあのガキは変な呼吸をしてたな、ヒッヒッフー、違う、コォオオオ、違う、ヒュウウウウ、こうか？」
「ゼェ、ゼェ、それを今すぐ止めろ、そして死ねェ」
「ヒュウウウウウ、ああ、頭が冴える呼吸だ、思い出した。人間の頃、お前らみたいな変な服を来た女を一族総出で襲ったんだ。だいぶ味方は死んだが捕まえて、何でそんなに強いのか吐かせたよ！呼吸のお陰なんだってな！俺以外は嘘だと思って更に拷問を続けたが俺は違う、そいつを観察してどういう呼吸法をしているのかそいつが死ぬまでに覚えた！だが鍛える前にこうして鬼にされちまったんだが・・・・・・今は違う。沼に長時間潜れるように肺を変質させてるのが良かったみたいだなぁ。今の俺は呼吸の天才だよ！」
　喋り終わった一本角は木の枝から落下する勢いで俺に向かって剣撃を放つ。
　剣撃は川の濁流を思わせる力強さで俺の頸を狙う。咄嗟に両腕で防御したが、代わりに両腕が切断されてしまった。【治癒加速】と【再生加速】、それに鬼化状態の再生力で十秒程で回復するだろう。
「フン、頸ごとは斬れなかったか。次は頸を斬ってやる」
「うるせェよ塵がァ！」
　俺は【闇沼ノ異界】を解除し、巨体のまま地上に上がる。ここまで来て全裸だのを気にする余裕はない。そして鬼が先ほどまで座っていた木に治りかけの腕で触れ、【根幹操作】と【枝葉操作】を組み合わせて五十尺（１５ｍ）程の木を槍状に変形させていく。
　１７尺（５ｍ）の俺と五十尺（１５ｍ）程の木の槍。少々つりあいが悪いが、武器としては十分だろう。
「テメェを挽き肉にして食ってやる！」
「ハハハ！どっちが鬼殺隊かわからないな！」
　槍を横に振り回し、一本角に叩きつけるが回避される。だが【枝葉操作】で鋭い枝を槍から飛び出させ、手傷を与える。
「チィ、潜るか」
「やらせねぇよ!?」

地中に潜る暇を与えないよう連撃。ぬるぬるとどじょう掬いのように躱されるが最後の大上段からの叩きつけは相手の右脚を叩き潰した。

再生される数秒の間に槍から枝を飛び出させ、相手の傷口に刺し、【養分吸収】で相手の再生を遅らせる。更に傷口を抉るために枝を延ばそうとするも、一本角は脚ごと枝を切り捨てて左脚で跳んで逃れた。

「ここで逃げ切れば俺は十二鬼月にもなれるかもしれない！二本角と三本角もあの世で喜ぶだろう！お前に喰われる訳にはいかないんだよォ！」

そうだ、二本角と三本角。俺もアビリティ【三位一体】を獲得した筈だ。今ぶっつけ本番で発動するしかない。

発動すると、俺の巨体がずるりと分裂して、人格も三つに分かれた。本能的に、俺が三人で三人が俺だと、一人でも欠けたら俺ではない別の俺になる、と悟った。言葉にはしづらい感覚だが腕や脚のように気軽に使い捨てには出来ない存在なのだ。この分身は。

だが一人も死なせずにこいつを殺せば何の問題も無い。俺達は近くの高木を先ほどと同様に操作し、一人二本の二刀流、合計六本の高木の槍で一本角を囲んだ。

「「「シネ」」」

「チィ、クソ！お前一体何故俺の真似をしやがる！俺の真似が出来る！」

お互い邪魔しないようにしつつも俺達はひたすら一本角を叩き続ける。

だが当たらない。膂力は十分だが、巨大化が原因か、速度が足りない。ぬるりぬるりと避け続けられる。

「ハン！二度も当たるヘマはしないぞ」

「おい、どうする！このままじゃこっちの体力の方が尽きるぞ！」「一人圧縮するぞォ！」「おう！」

一人は後方に下がり、二人掛かりで攻め続ける。当然こちらが減った分相手の余裕が増える。相手は闇沼に潜る隙こそ無い物の、こちら

の脚元を沼でぬかるませてきた。だがなんとか二人で支え合い、連撃を続ける。
「だいぶ呼吸にも慣れてきた。型ってモンを一丁使ってやろうかなァ！」
一本角は闇沼に日輪刀を浸け、振り上げて沼の闇をこちらに飛ばしてくる。沼の闇は地面から分離するとすぐに大量の土塊となり、こちらの頭に直撃した。
「・・・・・・で、これが何だって？」
土塊が直撃した程度で巨大化した俺はびくともしない。だが常人がこれを食らえば土に埋もれ、一時的に身動きが取れなくなるだろう。
「泥の呼吸、壱の型、泥裡土塊・・・・・・失敗っぽいな。そんじゃあ弐の型！」
「させるかよ！」「オラァアア！」
二人で叩く、が柔らかいゴムのような感触がそれを阻む。
「弐の型、泥亀」
沼の闇が刀を覆い、すっぽんの甲羅のような楯となって俺たちの打撃を防いでいた。槍が弾かれ、その隙に一本角の鬼が次の型を出す。
「参の型、泥火山！」
刀を地面に浸け、そのまま一回転してから斬り上げた。地面から吹き出した泥の濁流が俺たち二人の足下を崩す。その隙に一本角は闇沼に潜り逃走を再開する。
「クソッ・・・・・・」
だが、後ろの草むらの中から声が聞こえてきた。
「圧縮完了したぞ！」
これが決め手だ。これで決めれないとより多くの犠牲者が出てしまう。
闇沼に半身を浸け泳いでいる一本角に向けて、【石礫生成】で作った直径一尺半（約５０ｃｍ）程の小岩を投げつける。
そこに常人の人差し指程の小さな俺をしがみつかせて。
「チッ！鬱陶しい！四の五の言わず陸の型ァ！泥龍・大決潰！」

一本角が闇沼に一端身を沈め、出てきたのは泥の龍。水分量が多く殆ど水に近いそれは、小さな俺と小岩を吹き飛ばすのにあまりにも容易い濁流だった。
だが、俺には川を上る鮭から手に入れたアレがあった。
(【逆流遡行の心得】発動)
逆流をどうやって遡ればいいのか、どの道筋を辿ればいいのか、どうやって向かい風ならぬ向かい水を自身の推進力と変えれば良いのか。手に取るように分かる。あまりにも限定的なアビリティだと思ったが、ここで力を発揮した。当然【高速遊泳】も発動して濁流を物ともせず俺は小岩を離れ一本角に近づく。
小岩は吹き飛ばされ、満足げに一本角は闇沼に潜る。その陰に小さな俺は潜む。
大きな俺二人は小岩や木の槍を投げ続ける。一本角は距離を取って安心したのか回避を気にせずに泳ぎ続ける。木の槍や小岩が掠めるもすぐに再生する。
だがその掠めた傷口に俺は延ばした神経を侵入させた。【肉体操作権奪取】だ。徐々に肉体操作権を自分の物にし、だが気づかれないようにその権利を行使しない。
大きな俺二人の投擲が届かなくなった頃、肉体操作権が完全に俺の物になる。意志でこれは抵抗されるため、気づかれないように一瞬だけあくびをさせ、その瞬間に俺は口腔内に入る。
「ふぁあああ、そういえば欠伸なんて何年ぶりッ・・・・・・オエェッゲホゲホ」
鬼の胃の中に入った俺は【寄生】を発動し鬼の臓器と一体化する。
「・・・・・・石でも口の中に入ったか?よし、あのお方ーーー無惨様に会って十二鬼月にしてもらわないといけないな。その前に腹ごしらえをッ・・・・・・ウッ・・・・・・・腹が減った・・・・・・・かなり喰った筈なのに・・・・・・・」
無惨にこいつを会わせて無惨の予定が少しでも狂うと浅草にこなくなる。そもそも腹ごしらえなんてさせてたまるか。
【養分吸収】を全開にして鬼の栄養分を俺のものにする。

「腹が・・・・・・腹が減った・・・・・・この際十六の女で無くても良い・・・・・・誰か人を喰わなければ・・・・・・」
一本角は人里に近づく。こいつを餓死させるか、こいつが人を喰うか。前者が早いことを祈りながら養分を吸収し続ける。
［能力名【沼の呼吸】のラーニング完了］
［能力名【異常発達肺胞】のラーニング完了］
「ガァァァァァァ、グワァァァァァ」
完全に暴走状態に入った。まだ人里には到達していないようだ。血鬼術は解除され、周りの物を破壊し続けている。良し、このままいけば・・・・・・
「鬼にした覚えの無い巨大な鬼が暴れていると聞いて来てみれば・・・・・・以前鬼にした忍者か。自分を大きく見せる血鬼術でも身につけたのか？」
どこかで聞き覚えのある声だ・・・・・・そうだ、前世のあの上弦の壱戦で聞いた無惨の声・・・・・・鬼舞辻、無惨？
無惨なら・・・・・・殺したい気持ちは満々だが、浅草決戦の前だ。絶対に感づかれてはならない。
「ゴァァァァァ、ッグ」
「煩い、少し黙れ」
一本角の体内に無惨の血液が流れ込んでくる。それを【養分吸収】で吸収しすぎないように避けつつ【養分吸収】を俺の生命を維持するための最低限に絞る。無惨の血を吸収しすぎると無惨と念話が繋がってしまうことが分かっているからだ。
［能力名【血中魔力操作】のラーニング完了］
［能力名【呪術：眷属呪殺】のラーニング完了］
吸収しすぎないように避けても、二つもアビリティをラーニングしてしまった。
「アグゥァァァッ・・・・・・む、無惨様⁉」
無惨の血の栄養により我を取り戻した一本角は無惨に気が付く。
「尋ねるが、巨大な鬼は何処に行った？」
「巨、巨大な鬼・・・・・・？あいつは人間、だったと思いますよ、妙

に血鬼術臭い術を使ってましたが」
「ふむ、では異能の人間か?確か産屋敷に客人が海外から来たというが、そいつか?鬼殺隊は異能の人間を毛嫌いしていた覚えがあるのだが・・・・・・まぁ数百年前の話だ。それで、何処に行った」
「えっと、確かあの近くだったたと思いますが・・・・・・」
「案内しろ」
マズい、マズいマズいマズいマズい!残り二人の俺どころか炭治郎と禰豆子まで殺されかねない!頼む、退避していてくれ・・・・・・!
「ふむ、誰もいないな。では、お前は引き続きその巨大な人間を探索しろ」
「はっ。そこで相談なのですが、私を十二鬼月にして頂けないでしょうか」
「ああ、いいぞ。・・・・・・これでお前は十二鬼月だ。名は・・・・・・独擭（どっかく）とするか。では、その巨大な人間を見つけたら私の名前を誰もいないところで呼べ。見つかるまでは決して呼ぶな」
血を少し分け与えられて一本角ーーー独擭は十二鬼月と言われた。十二鬼月ってそんなに簡単になれる物なのか?下弦の何とも言われていないし。適当こいてるだけじゃないのかこの無惨。
そう言って無惨は姿を消した。これは浅草決戦まで【寄生】を解けないな・・・・・・

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

二人組の玄弥ｓｉｄｅ
俺たちは小さい方の俺を投げ、あいつが寄生したことを確信した後、【肉体圧縮】を再度発動し、通常の大きさに戻っていた。
俺たちは一人になろうとして【三位一体】を解除しようとするも、解除出来ない。どうやら俺が三人同じ場所に揃っていないと解除出来ないようだ。二人分の服が無かったので一人の服を分けて下半身を隠し、炭治郎に合流するために町の方に移動する。
「げ、玄弥が二人!?一体どっちが本物なんだ?」
「「どっちもだ」」「沼の鬼は三体いただろ?」「そいつの能力を手に入れてな」「俺たちはそのうちの二人だ」「取り敢えず町に行って服を買わ

せてくれ」
「そ、そうなのか・・・・・・相変わらず玄弥の能力は常識の外にあるな・・・・・・」
　そこから一刻（３０分）程すれば町はもう夜明けであり、呉服屋も早いところは開く時間だったので、そこで安物の服を購入する。安物とは言っても襤褸を着るという訳には行かず、手持ちの額が足りなかったので炭治郎に少し貸してもらった。後で鋏鴉経由で返す予定だ。
「かくかくしかじかで、逃した一本角の沼鬼は俺が体内に潜んで何時でも殺せる状態にある筈だ。分裂した俺たちは念話とかが出来る訳じゃねぇから、実際のところどうなのかは知らんが」
「うちの禰豆子が、済まなかった・・・・・・！玄弥を鬼と勘違いして攻撃してしまうなんて！」
　炭治郎は頭を下げる。
「いいぜ別に」「日輪刀を奪われたのは癪だったが、それは別に禰豆子のせいじゃねぇしな」「強いて言うなら事前の情報共有が足りなかったってことが問題か」
「ありがとう、玄弥。それにしても、二人が同じ顔というのは目立つんじゃないだろうか。顔を隠すのに丁度良いお面を持っているから、それを使うと良い」
「ああ、助かる」「隊服を着ていない方の俺が付けることにするよ」
　そう言って狭霧山から見て北西の町を後にした。
《二十五日目》
「カァ、カァ。次の任務は浅草ァ！浅草に鬼が出ているとの噂ァ」
　炭治郎の鋏鴉がそういって飛び立つ。俺は炭治郎に耳打ちした。
「炭治郎。次の任務、鬼舞辻無惨が出てくるかもしれない」
「何だって!?」
「秘密だ。お前の嗅覚で是非鬼舞辻無惨を見つけだして欲しいとお館様ーーー鬼殺隊の指導者からの伝言だ」
「・・・・・・わかった」
「それと、もし戦闘になった場合にはそれには参加しないこと」

だが、憎しみを押さえ込んだ無表情で炭治郎は返した。
「それは承知出来ない。無惨は必ずこの手で殺す。その戦闘に参加しなければ俺の生きている意味の半分は無くなってしまう」
これは、説得しても意味が無さそうだ。こちらが譲歩するしかない。
「わかった。だが戦闘行為は柱の支援に留めてくれ。決して先陣を切ったりするな」
「・・・・・・ありがとう」
お面を被った方の俺は一足先に浅草に行き、珠世さんの探索をしておく。見つけるのは難しいが、愈史郎の血鬼術は無惨戦に有効だろう・・・・・・というか必須に近い。お館様も探してみるとは言っており私服の隠を十数名程派遣しているので、人海戦術に俺も参加する。
独攫に寄生した俺は身を潜め、ただひたすらに感づかれるのを防ぐ。人を喰うと鬼殺隊にバレかねないということで、幸いなことに人里離れた山奥で呼吸の鍛錬をしている。鬼は意図的な肉体の変異は起こせる物の、超再生が起こらないため鍛錬に肉体的な意味はない。だが技術は違う。技術は鬼でも訓練次第で身につけることが可能だ。行動の最適化と言っても良いだろう。
《二十六日目》
運命の日だ。
昨日の夜明け間際に、ようやく愈史郎を見つけることが出来た。
方法はこうだ。珠世という名前は無惨に知られているから使えない。警戒されるかもしれないから他者に尋ねるということも出来ない。俺も珠世と愈史郎という名前は無限城で知らされただけなので顔を直接知っている訳ではない。炭治郎からは鬼とは明かされなかったが少年と女性であるということは聞いた。
だから夜の間に、少しでも怪しいなと思った人物にひたすら【人間鑑定】を掛け続ける。【人間鑑定】は人間にしか効果が無いため愈史郎と珠世には聞かない筈だ。無惨にも効かない訳だが、無惨は大人の男の姿をしていると聞く。その姿の男には【人間鑑定】を掛けずに少年

と若い女性に絞って掛け続ける。他の隠も少年と若い女性の瞳孔を確認し続けた。

ようやく愈史郎に会って、今までの経緯を説明すると、一応は納得してくれて、直接戦闘には参加しないが不可視化の効果を持つ〝目くらましの札〟も百数十枚ほど生成して用意してくれた。ただし珠世と鬼殺隊を決して接触させないように条件付きで。

これを昼間に目立たぬ格好で結集した柱達に配る。一部の柱は髪色も目立つので、そういう人は髪を結って頭巾を被っている。柱と最上級の隊士である甲以外は足手まといであると判断され浅草から離れているらしい。その数、柱を含めて５４名。彼らに二枚ずつ、一枚は予備として〝目くらましの札〟を配布し、残りは炭治郎と禰豆子のために取っておく。

浅草に来た炭治郎と隊服の俺はお面の俺と合流し、夜を待つ。